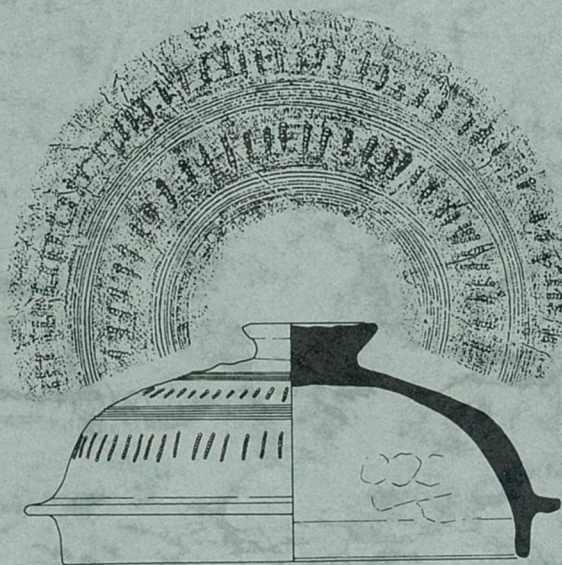


(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第50輯

陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ

近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書

本文編



1990

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第50輯

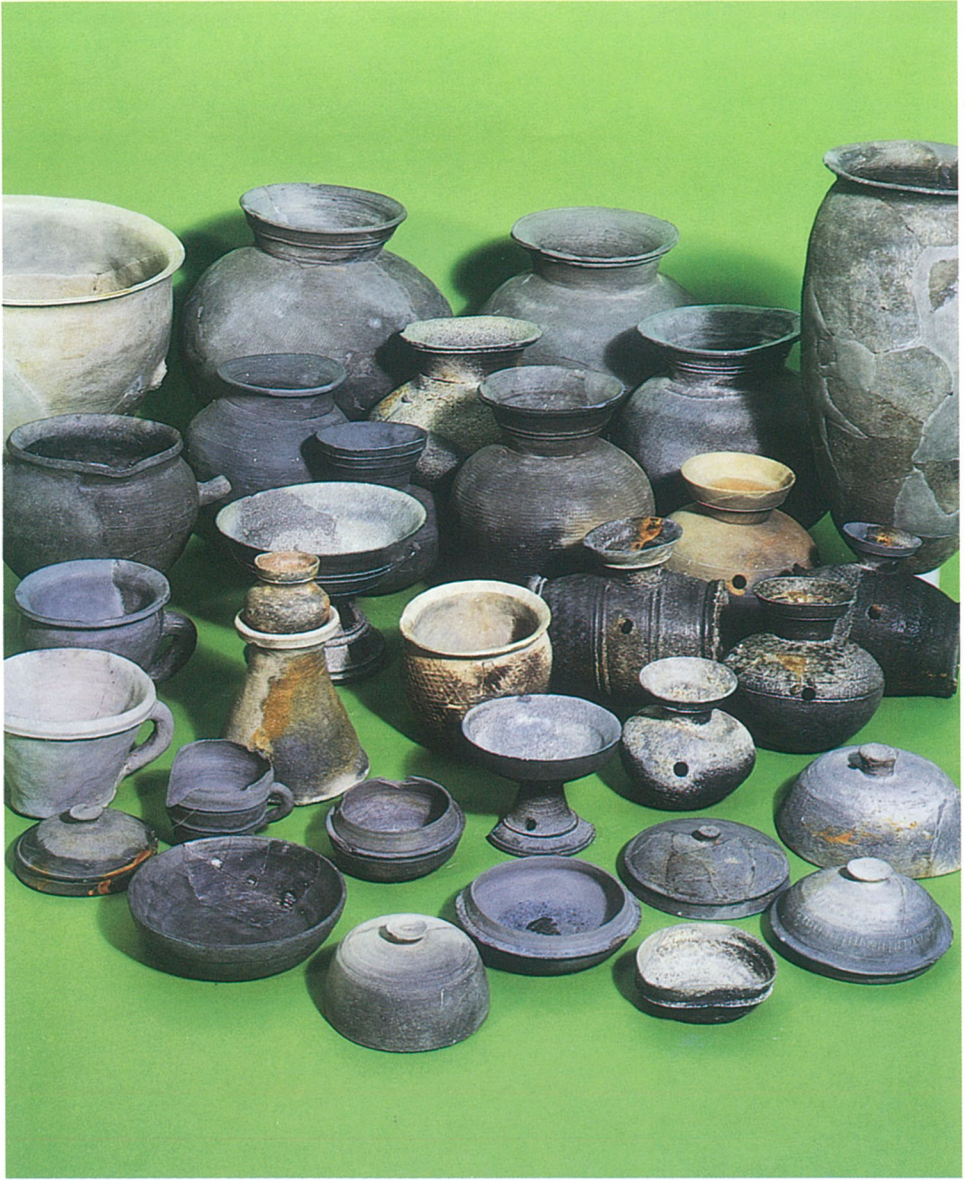
すえむら 陶邑・おばでら 大庭寺遺跡Ⅱ

近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書

本文編

1990

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



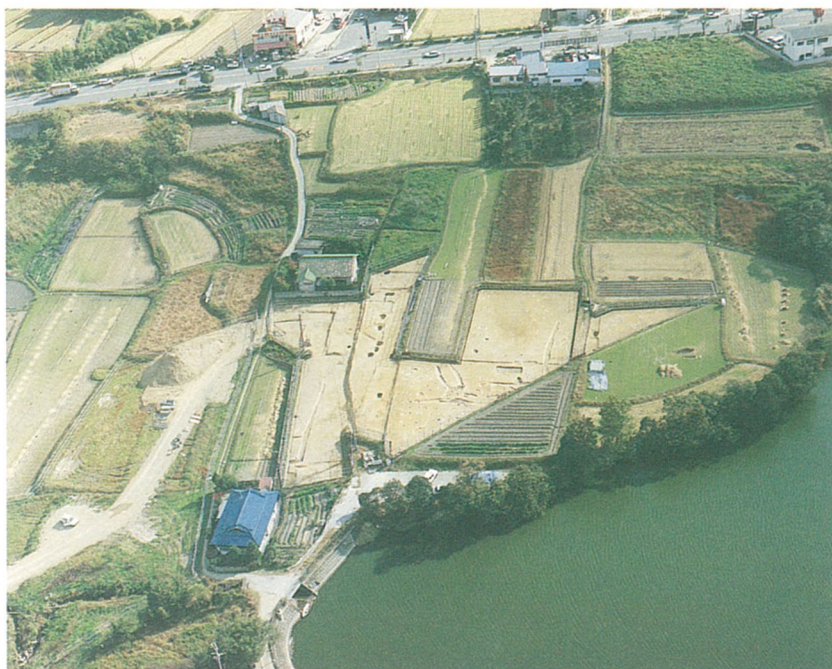
大庭寺遺跡出土の初期須恵器群



1988年度調査 II区 938-00 (南から)



1989年度調査 遺跡遠景 (東から)



1988年度調査 I区A (北から)



1989年度調査 I区B (南から)



1988年度調査 II区 (東から)



1988年度調査 IV区B (北から)

序 文

大庭寺遺跡のあります堺市泉北丘陵は500基にのぼる須恵器窯を初め、各時代の遺跡が眠る埋蔵文化財の宝庫です。大庭寺遺跡周辺は特に遺跡の密度が高く、丘陵部のみならず石津川の流れる谷間の平地にも、縄文時代から中世にわたる遺構・遺物が数多く発見されております。大阪府ではこれまでも幾多の開発にともなって、埋蔵文化財の保護に腐心してまいりました。関西国際空港の開港にともなう近畿自動車道の建設等に当たっても、事業者側との協議を諮りながら、昭和60年度より発掘調査を財団法人大阪府埋蔵文化財協会に委託してまいりました。

大庭寺遺跡の調査は昭和62年度からはじめて、すでに3年目が終了いたしました。この間、石津川の西岸で奈良時代から鎌倉時代にわたる大規模な集落の址や溝、河川の跡がみつき、丘陵部でも大量の初期須恵器や奈良時代、平安時代の集落の址が発見されております。次年度以降の発掘調査も予定されており、この地域の古代史にさらに大きな光が当てられることと思います。

本調査を実施するにあたって、日本道路公団大阪建設局および、堺市教育委員会、関係者各位と調査を担当された財団法人大阪府埋蔵文化財協会の皆様に深く感謝をしております。今後とも本府の文化財行政に対して各位の変わらぬご理解とご援助をお願い申し上げます。

平成2年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 川 瀬 誠

序 文

近畿自動車道路松原海南線建設に先立つ堺市大庭寺遺跡の発掘調査は、昭和62年度に始めて3年を経過いたしました。この間、縄文時代から弥生時代の遺物の他、古墳時代中期の大量の初期須恵器や建物址、奈良時代から平安時代の掘立柱建物群や井戸、鎌倉時代の建物群や溝の検出など、どの時代の遺構・遺物をとりあげても特筆すべき成果をあげてまいりました。

中でも、初年度の調査時から注目を集めていました初期須恵器は最古の一群に属し、一緒に出土している韓式土器や土師器とともに、その内容と量の豊かさは、これまで各地で知られていた断片的資料をはるかにしのいでいます。須恵器の成立に関わる朝鮮半島からの技術伝播の実態を探るためには、不可欠の重要な資料といえるでしょう。

これまでの調査結果につきましては、すでに昭和62年度調査成果を「陶邑・大庭寺遺跡」として報告しており、本書はその「II」として、昭和63年度および平成元年度調査の成果を報告いたします。今回の成果報告が当地域をはじめ各時代の研究の一助となれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、職員の派遣など本協会の事業にご理解をいただいている近畿各府県・市・町教育委員会ならびに大阪府教育委員会、日本道路公団大阪建設局、堺市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも当協会の事業に変らぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成2年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 仁賀奈 祐 吉

例 言

1. 本書は近畿自動車道松原・海南線建設予定地内に所在する、大庭寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会（以下、大阪府埋蔵文化財協会と称する）が実施した。
3. 本書では大庭寺遺跡で当協会が担当した調査の内、1988年度・1989年度調査分を掲載している。調査は大阪府埋蔵文化財協会技師が担当した。1988年度調査は、富加見泰彦・山上雅弘・有井広幸が行い、1989年度調査は富加見泰彦・積山 洋が行った。
実施期間は、1988年度調査が1988年8月1日～1989年3月25日、1989年度調査が1989年5月6日～1989年9月30日である。
さらに、これらの調査に先だって1986年度に野々井遺跡・大庭寺遺跡の試掘調査が行なわれた。既報告『陶邑・大庭寺遺跡』に編集の都合で掲載できなかった原稿についても今回合わせて報告した。
4. 整理は、1988年度分については、山上・有井・富加見、1989年度分については、積山・富加見が行った。遺構写真撮影は各調査担当者、遺物の写真撮影は小倉勝・加茂幸彦が行った。編集は富加見・山上が行った。
5. 調査の実施にあたっては、日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所、堺市教育委員会および地元関係各位の協力を得た。
6. 本調査では、土器の産地同定を奈良教育大学教授 三辻利一氏、須恵器に付着した顔料の同定には武庫川女子大学教授 安田博幸氏に鑑定を依頼した。
7. 調査は当協会の発掘調査規定により国土座標第VI系を基準に地区割設定をして行なった。本文中および挿図に用いた座標もこれに従い、方位は座標北を示す。地区名の表記

は地形図の表題を略し、500m区画以下4 m区画まで示した。

8. 本書で用いた遺構の呼称は当協会の発掘調査規程の表記に基づき遺構の種類にかかわらず検出順に通し番号を付した。さらに、遺構の記号を記入して種類を示した。本書に
関係する記号は以下のとおりである。

OB 建物 OD 竪穴住居址 OO 土壌・土坑 OP 柱穴

OS 溝 OW 井戸 OA 道 OR 河川

OX その他・不明

9. 調査及び報告書作成にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課の他・以下の方々
にご指導・ご教示を受けた。記して感謝の意を表したい。

小田富士雄	(福岡大学)
中村 浩	(大谷女子大学)
三辻利一	(奈良教育大学)
安田博幸・森真由美	(武庫川女子大学)
上原真人・千田剛道	(奈良国立文化財研究所)
岡崎正雄・加古千恵子	(兵庫県教育委員会)
酒井清治	(埼玉県立歴史資料館)
田中英男	(奈良県橿原考古学研究所研究嘱託)
武末純一	(北九州市立博物館)
定森秀夫	(京都文化財団)
植木 久・趙 哲済	(財団法人大阪市文化財協会)

(順不同・敬称略)

凡 例

1. 遺構名は大阪府埋蔵文化財協会の調査規程に従って、遺構図面・図版と対象できるようにした。

2. 遺物は遺物挿図に通し番号を付し、本文中の遺物は遺物図・図版と一致するようにした。遺物番号は、第IV章の各節ごとに、略号を付し番号とした。各節の略号は以下の通りである。(異なる時期の遺物についても、節の中では通し番号とした。)

第2節 弥生時代……………Y 第3節 古墳時代……………K

第4節 奈良時代……………N 第5節 平安時代……………H

第6節 平安末～鎌倉時代……………T 第7節 その他(時代不明)……………F

この他、古墳時代の中で、56-OR (1987年度調査)の遺物に付いては『陶邑・大庭寺遺跡』(1989)の旧番号を付し、別扱いとした。

3. 本書の遺構実測図・文中に用いた方位のNは、国土座標系の座標北を示す。尚、真北方向へは0°19′東へ、磁北は6°20′西へ振る位置関係にある。

4. 標高はT.P.+と表示した。国土座標の単位はすべてkmである。

5. 遺物は質の違いによって以下のように、断面を塗り分けた。

須恵器—黒色 土師器・陶磁器—白色

軟質土器・黒色土器・瓦器(瓦質を含む。) —網目

6. 土色の記述は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帳5版』(1976)による。

7. 遺構の位置に付いてはその所在する地区を記した。但し、遺構が1つの地区に納まらない場合は、西北端の地区を記述し、「K18A B周辺に位置する。」と表現した。この他、溝については検出した両端の地区を記した。「K18A B～K18C Dに流れる溝である。」などと表した。

8. 本書の執筆分担は目次に記した。
9. 遺物は4分の1を基本としたが、石器については3分の2、大型の遺物については6分の1で記載した。さらに、このスケールに納まらないものについては、その都度スケールを付し、混乱を避けるように努めた。
10. 古墳時代は便宜的にI期・II期と分類して記述した。この場合須恵器をその指標とし、I期は中村編年I型式2段階まで、II期はそれ以降とした。
11. 初期須恵器とは定型化以前の須恵器で、本書では中村編年のI型式2段階までを指している。
12. 陶質土器と初期須恵器については両者に明確な基準を設定することは困難との判断から初期須恵器に包括して取り扱うことにした。
13. 韓式系土器と呼ばれる一群の土器については朝鮮半島で「赤褐色軟質土器」と呼ばれている土器の影響を受けて日本で製作された土器との理解から土師器の「小若江北」段階以後、新たに加わった器種とした。
14. 須恵器・韓式系土器についても陶質土器・初期須恵器と同様、判断が困難であるが可能な限りを形態で分類した。困難なものについては形態に加え、手法・色調によって分類した。

本文目次

巻頭図版	第4節 奈良時代(積山・山上)……	193
序文	第5節 平安時代(山上)……	255
例言	第6節 平安末～鎌倉時代(山上)…	283
凡例	第7節 その他の時期……	301
第I章 調査に至る経緯(富加見)……	(近世・時期不明の遺構)	
第II章 遺跡の地理的歴史的環境(有井) …	(積山・山上・有井) ……	301
第III章 調査の概要……	第8節 出土遺物の平面分布(山上)	315
第1節 調査の方法……	第V章 まとめ……	323
第2節 これまでの調査……	第1節 古墳時代(富加見)……	323
第3節 調査のあらまし……	第2節 集落の変遷(山上)……	331
第IV章 調査の成果……	第3節 大庭寺遺跡に関連する	
第1節 層序(積山・山上・有井)…	史料について(有井)……	351
第2節 弥生時代(富加見・積山・有井)	第VI章 分析……	353
第3節 古墳時代(//) 49	第1節 大庭寺遺跡出土硬質土器の	
1. 古墳時代I期……	蛍光X線分析(三辻利一)…	353
2. 古墳時代II期	第2節 堺市大庭寺遺跡の柱穴掘方の杯	
1) 竪穴住居址・	内より採集された赤色顔料物質	
掘立柱建物……	の微量化学分析と材質	
81	(安田博幸・森真由美)…	359
2) 柱穴……	総括(富加見)……	363
100	SUMMARY ……	364
3) その他の遺構……		
103		
3. 56-OR ……		182

挿図目次

第1図 調査地周辺地形分類図(1/20000)	第3図 調査地地区割模式図……	6
……………	3	
第2図 周辺遺跡分布図(1/25000)	第4図 1986年度調査地位置図(1/5000)	
……………	……………	7
5	第5図 調査地地区割全体図(1/2000)	

	9		38
第6図	I区A・B全体概要図(1/800)		第23図	94-OD平面・断面図(1/80)、	
	10		出土遺物(1/4)	39
第7図	II区全体概要図(1/600)	13	第24図	IV区D第5層弥生時代遺構平面	
第8図	III区A・B全体概要図(1/400)			(1/400)・断面(1/100,1/50)図	
	14		40
第9図	IV区A・B・C・D全体概要図		第25図	IV区D第5層遺構他出土弥生	
	(1/800)	16		土器(1/4)	42
第10図	V区全体概要図(1/500)	17	第26図	弥生時代石器(2/3)	43
第11図	1989年度試掘調査地位位置図		第27図	包含層出土石器1(2/3)	46
	(1/5000).....	18	第28図	包含層出土石器2(2/3)	47
第12図	I区土層断面位置図(1/1000)		第29図	包含層出土石器3(2/3)	48
	19	第30図	古墳時代全体図(1/3000).....	49
第13図	I区土層断面図(1/40).....	20	第31図	古墳時代I期 I・II区	
第14図	II区土層断面図(1/40).....	21		遺構配置図(1/800)	50
第15図	III区A・B土層断面図(1/40)		第32図	1081-OD平面・断面図(1/40)	
	23・24		51
第16図	IV区D層序断面図(1/40)		第33図	295-OO平面・断面図(1/40)	
	27・28		52
第17図	IV区B・D層序断面図(1/40)		第34図	295-OO出土遺物(1/4).....	53
	29・30	第35図	296-OO平面・断面図(1/40)	
第18図	IV区A・B・C土層断面図			56
	(1/40).....	32	第36図	296-OO遺物出土状態(1/20)	
第19図	V区土層断面図(1/80)			57
	33・34	第37図	296-OO出土遺物1(1/4)	
第20図	調査地地形模式図			58
	(平面1/2000・断面縦1/160・横1/2000)		第38図	296-OO出土遺物2(1/4)	
	35・36		59
第21図	弥生時代全体図(1/3000).....	37	第39図	296-OO出土遺物3(1/4, 1/2)	
第22図	弥生時代遺構位置図(1/1000)			60

第40図	111-O S 平面(1/80)・ 断面(1/40)図……………	61	第57図	2005-O O 出土遺物(1/4) ……………	77 78
第41図	111-O S 出土遺物(1/4)…	62	第58図	8-O S 平面・断面図(1/80) ……………	79
第42図	601-O S 平面・断面図(1/20) ……………	63	第59図	8-O S 出土遺物(1/2, 1/4, 1/6)……………	80
第43図	601-O S 遺物出土状態(1/60) ……………	64	第60図	古墳時代 II 期掘立柱建物配置図 (1/1000)……………	82
第44図	601-O S 出土遺物 1 (1/4) ……………	65	第61図	1075-O D 平面・断面図(1/60) ……………	83
第45図	601-O S 出土遺物 2 (1/4) ……………	66	第62図	1075-O D 遺物出土状態(1/20)・ 出土遺物(1/4) ……	84
第46図	601-O S 出土遺物 3 (1/6) ……………	67	第63図	859-O B 出土遺物(1/4)…	85
第47図	601-O S 出土遺物 4 (1/6) ……………	68	第64図	840・859-O B 平面・断面図 (1/80)……………	85
第48図	257-O S 平面(1/80)・ 断面(1/40)図……………	69	第65図	840-O B 出土遺物(1/4)…	86
第49図	257-O S 出土遺物(1/4)…	70	第66図	762・806-O B 平面・断面図 (1/80)……………	86
第50図	190-O S 平面・断面図(1/80) ……………	71	第67図	806-O B 出土遺物(1/4)…	87
第51図	190-O S 出土遺物(1/4)…	71	第68図	762-O B 出土遺物(1/4)…	87
第52図	1100-O S ・2005-O O 平面・ 断面図(1/20)……………	73	第69図	659-O B 他平面・断面図(1/80) ……………	88
第53図	1100-O S 出土遺物 1 (1/4) ……………	74	第70図	659-O B 出土遺物(1/4)…	89
第54図	1100-O S 出土遺物 2 (1/4) ……………	75	第71図	570-O B 他平面・断面図(1/80) ……………	90
第55図	1100-O S 出土遺物 3 (1/4) ……………	76	第72図	570-O B 出土遺物(1/4)…	91
第56図	1100-O S 出土遺物 4 (1/4)		第73図	539-O B 平面・断面図(1/80) ……………	91
			第74図	539-O B 出土遺物(1/4)…	91

第75図	201-O B平面・断面図(1/80) …………… 92	配置図(1/1000)…………… 104
第76図	150-O B平面・断面図(1/80) …………… 93	第91図 132・214・241-O O平面・ 断面図(1/40), 214-O O 出土遺物(1/4)…………… 105
第77図	127-O B平面・断面図(1/80) …………… 94	第92図 209-O O平面・断面図(1/40), 出土遺物(1/4)…………… 106
第78図	230-O B平面・断面図(1/80) …………… 95	第93図 210-O O, 309-O S 平面・断面図(1/80)…………… 106
第79図	253-O B平面・断面図(1/80) …………… 96	第94図 210-O O遺物出土状態(1/20) …………… 107
第80図	253-O B出土遺物(1/4)… 97	第95図 210-O O出土遺物(1/4)… 108
第81図	36-O B平面・断面図(1/80) …………… 97	第96図 309-O S出土遺物(1/4)… 108
第82図	36-O B出土遺物(1/4) … 98	第97図 130-O O平面・断面図(1/40), 出土遺物(1/4)…………… 109
第83図	385-O B平面・断面図(1/80) …………… 98	第98図 248-O O平面・断面図(1/40) …………… 109
第84図	66-O B平面・断面図(1/80) …………… 99	第99図 248-O O出土遺物 (土器1/4, 管玉1/2)…………… 110
第85図	66-O P平面・断面図(1/40), 66・385・577-O B出土遺物 (1/4)…………… 100	第100図 910-O O平面・断面図(1/40) …………… 110
第86図	577-O B平面・断面図(1/80) …………… 100	第101図 888-O O平面・断面図(1/40) …………… 111
第87図	385-O P平面・断面図(1/20), 出土遺物(1/4)…………… 101	第102図 888-O O出土遺物(1/4)… 111
第88図	古墳時代 I 区柱穴出土遺物(1/4) …………… 102	第103図 882-O O平面・断面図(1/40), 出土遺物(1/4)…………… 111
第89図	古墳時代 II 区柱穴出土遺物(1/4) …………… 103	第104図 677-O O平面・断面図(1/20) …………… 112
第90図	古墳時代 II 期 I ・ II 区遺構 …………… 113	第105図 677-O O出土遺物(1/4)… 112
		第106図 1158-O O遺物出土状態(1/40) …………… 113

第107図	1158-〇〇出土遺物 1 (1/4) ……………	114	第122図	114-〇 S 出土遺物 2 (1/4, 1/6) ……………	129
第108図	1158-〇〇出土遺物 2 (1/4) ……………	116	第123図	378-〇〇遺物出土状態(1/40) ……………	129
第109図	1158-〇〇出土遺物 3 (1/4) ……………	117	第124図	378-〇〇出土遺物(1/4)…	130
第110図	1158-〇〇出土遺物 4 (1/4) ……………	118	第125図	115-〇 S 出土遺物(1/4)…	131
第111図	938-〇〇平面・断面図(1/10) ……………	119	第126図	115-〇 S, 378-〇〇 出土遺物(1/4) ……………	132
第112図	938-〇〇出土遺物 (土器1/4, 白玉1/1)……………	120	第127図	375・942-〇 S 平面・ 断面図(1/80)……………	133
第113図	891・1024・1041-〇〇, 1025- 〇 S 平面・断面図(1/80)…	121	第128図	375-〇 S 出土遺物 1 (1/4) ……………	134
第114図	891・1041-〇〇 出土遺物(1/4) ……………	122	第129図	375-〇 S 出土遺物 2 (1/4) ……………	135
第115図	1025-〇 S 遺物出土状態(1/20) ……………	122	第130図	942-〇 S 出土遺物(1/4)…	135
第116図	1025-〇〇出土遺物 (1/4) ……………	123	第131図	57-〇 S 平面(1/80)・ 断面(1/40)図……………	136
第117図	116-〇 S 平面・断面図(1/80) ……………	123	第132図	57-〇 S 出土遺物(1/4) ……	137
第118図	116-〇 S 出土遺物(1/4)…	123	第133図	408-〇 S 平面・断面図(1/40), 出土遺物(1/4) ……………	137
第119図	114・115・375・377-〇 S, 211・ 212・378-〇〇平面(1/80)・ 断面(1/40)図 ……………	125・126	第134図	1500-〇〇出土遺物(1/4) ……………	138
第120図	114-〇 S 遺物出土状態(1/30) ……………	127	第135図	II区古墳時代溝群 平面(1/200)・断面(1/40)図 ……………	139・140
第121図	114-〇 S 出土遺物 1 (1/4) ……………	128	第136図	405-〇 S 出土遺物(1/4)…	141
			第137図	484-〇 S 遺物出土状態(1/80) ……………	142
			第138図	484-〇 S 出土遺物 1 (1/4) ……………	143

第139図	484-O S 出土遺物 2 (1/4) …………… 144	(1/800) …………… 158
第140図	484-O S 出土遺物 3 (1/4) …………… 145	第155図 161-O O 平面・断面図(1/80), 出土遺物(1/4) …………… 158
第141図	484-O S 出土遺物 4 (1/4) …………… 146	第156図 2・3・4-O S, 21-O X 平面(1/250)・断面(1/40)図 …………… 159
第142図	892・887-O S 出土遺物(1/4) …………… 147	第157図 2-O S・21-O X 出土遺物(1/4) …………… 159
第143図	550-O S 出土遺物(1/4, 1/6) …………… 149	第158図 古墳時代 I 区包含層出土遺物 (1/4) …………… 160
第144図	765-O X 平面・断面図(1/40), 出土遺物(1/6) …………… 150	第159図 初期須恵器拓影 1 (1/1) …… 161
第145図	936-O X 平面・断面図(1/80) …………… 151	第160図 初期須恵器拓影 2 (1/1) …… 162
第146図	936-O X 出土遺物 1 (1/4) …………… 151	第161図 初期須恵器拓影 3 (1/1) …… 163
第147図	936-O X 出土遺物 2 (1/4) …………… 152	第162図 韓式系土器拓影 1 (1/1) …… 164
第148図	1125-O X 全体図(1/80) …… 153	第163図 韓式系土器拓影 2 (1/1) …… 165
第149図	1125-O X 遺物出土状態(1/40) …………… 154	第164図 古墳時代 II 区包含層出土遺物 1 (1/4) …………… 166
第150図	1125-O X 出土遺物 1 (1/4) …………… 154	第165図 古墳時代 II 区包含層出土遺物 2 (1/4) …………… 167
第151図	1125-O X 出土遺物 2 (1/6) …………… 155	第166図 古墳時代 II 区包含層出土遺物 3 (1/4) …………… 168
第152図	84-O S 平面(1/400)・ 断面(1/40)図…………… 157	第167図 古墳時代 II 区包含層出土遺物 4 (1/4) …………… 169
第153図	84-O S 出土遺物(1/4) …………… 157	第168図 古墳時代 II 区包含層出土遺物 5 (1/3) …………… 170
第154図	古墳時代 II 期 IV 区遺構配置図	第169図 古墳時代 II 区包含層出土遺物 6 (1/4) …………… 171
		第170図 古墳時代 II 区包含層出土遺物 7 (1/2) …………… 171
		第171図 古墳時代 II 区包含層出土遺物 8

	(1/4) ……………	172	第188図	556-O B 出土遺物(1/4) ……	197
第172図	古墳時代Ⅱ区包含層 出土遺物 9 (1/4, 1/2) ……	173	第189図	540・543-O S 平面(1/100)・ 断面(1/40)図 ……………	198
第173図	古墳時代Ⅲ区包含層出土遺物 (1/4) ……………	173	第190図	543-O S 遺物出土状態(1/40) ……………	198
第174図	古墳時代Ⅳ区包含層出土遺物 (1/4) ……………	173	第191図	543-O S 出土遺物(1/4) ……	199
第175図	古墳時代河川(56-O R) 出土遺物 1 (1/6) ……………	183	第192図	540-O S 出土遺物(1/4) ……	199
第176図	古墳時代河川(56-O R) 出土遺物 2 (1/6) ……………	184	第193図	B 群遺構配置図(1/800) ……	200
第177図	古墳時代河川(56-O R) 出土遺物 3 (1/6) ……………	186	第194図	630-O B 平面・断面図(1/80) ……………	201
第178図	古墳時代河川(56-O R) 出土遺物 4 (1/6) ……………	187	第195図	523・609・630-O B 出土遺物 (1/4) ……………	201
第179図	古墳時代河川(56-O R) 出土遺物 5 (1/6) ……………	189	第196図	468・523-O B 平面・断面図 (1/80) ……………	203
第180図	古墳時代河川(56-O R) 出土遺物 6 (1/6) ……………	190	第197図	609・610-O B 平面・断面図 (1/80) ……………	204
第181図	奈良時代全体図(1/3000) ……	193	第198図	393-O B 出土遺物(1/4), 428-O P (1/20), 393・407-O P (1/40) 平面・断面図 ……	205
第182図	C 群遺構配置図(1/800) ……	194	第199図	393-O B 平面・断面図 (1/80) ……………	206
第183図	157-O B 平面・断面図(1/80) ……………	195	第200図	387-O B 平面・断面図 (1/80) ……………	207
第184図	174-O P 出土遺物(1/4) ……	195	第201図	387-O B 出土遺物(1/4) ……	207
第185図	658-O B 平面・断面図(1/80) ……………	196	第202図	389-O B 平面・断面図(1/80) ……………	209
第186図	658-O B 出土遺物 (土器1/4, 埴1/3) ……………	196	第203図	389-O B 出土遺物(1/4) ……	209
第187図	556-O B 平面・断面図(1/80) ……………	197	第204図	354-O B 出土遺物 (土器1/4, 柱材1/6), 369・370-O P 平面・ 断面図(1/20) ……………	210

第205図	354-O B 平面・断面図(1/80) …………… 211	第220図	28-O B 平面・断面図(1/80) …………… 225
第206図	282-O B 出土遺物(1/4) …… 212	第221図	D 群遺構配置図(1/800) …… 226
第207図	282-O B 平面・断面図(1/80) …………… 213	第222図	171・190-O B 平面・断面図 (1/80) …………… 227
第208図	227・255-O B 平面・断面図 (1/80) …………… 214	第223図	1・13・216・219・221-O S 断面図(1/40) …………… 228
第209図	191-O B 平面・断面図(1/80) …………… 216	第224図	36-O O 平面・断面図(1/80), 出土遺物(1/4) …………… 229
第210図	191・255・227-O B 出土遺物 (1/4) …………… 216	第225図	奈良時代柱穴出土遺物 (1/4) …………… 230
第211図	325-O B 平面・断面図(1/80) …………… 217	第226図	67-O P 平面・断面図(1/40), 柱材(1/6) …………… 231
第212図	325・371・890-O B 出土遺物 (1/4) …………… 217	第227図	奈良時代 II 区包含層出土遺物 1 (1/4) …………… 233
第213図	その他の掘立柱建物(1/160) …………… 218	第228図	奈良時代 II 区包含層出土遺物 2 (1/4) …………… 234
第214図	奈良時代土坑・溝配置図(1/800) …………… 221	第229図	奈良時代 II 区包含層出土遺物 3 (1/4) …………… 235
第215図	710-O O 平面・断面図(1/80), 出土遺物(1/4) …………… 221	第230図	奈良時代 II 区包含層出土遺物 4 (1/4) …………… 236
第216図	791-O O 平面・断面図(1/40), 出土遺物(1/4) …………… 222	第231図	奈良時代 II 区包含層出土遺物 5 (1/4) …………… 237
第217図	1074・889・886-O S 断面図 (1/40), 886-O S 出土遺物(1/4) …………… 222	第232図	奈良時代 II 区包含層出土遺物 6 (1/4) …………… 239
第218図	A 群遺構配置図(1/800) …… 223	第233図	奈良時代 II 区包含層出土遺物 7 (1/4) …………… 241
第219図	28-O B 出土遺物(1/4), 111-O O, 29・34・40-O P 平面・断面図(1/20) …………… 224	第234図	奈良時代 II 区包含層出土遺物 8 (1/4) …………… 242
		第235図	奈良時代 II 区包含層出土遺物 9

	(1/4)	243		260
第236図	奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物10		第251図	201-O P 平面・断面図(1/40),	
	(1/4)	244		172-O B 出土遺物(1/4)...	260
第237図	奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物11		第252図	162-O B 平面・断面図(1/80)	
	(1/4)	246		261
第238図	奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物12		第253図	126-O P 平面・断面図(1/20),	
	(1/4)	247		106-O B 出土遺物(1/4)...	262
第239図	奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物13		第254図	106-O B 平面・断面図(1/80)	
	(1/4)	248		263
第240図	奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物14		第255図	40-O B 平面・断面図(1/80)	
	(1/4)	248		264
第241図	奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物15		第256図	55-O P 平面・断面図(1/40),	
	(1/4)	249		40-O B 出土遺物(1/4) ...	264
第242図	奈良時代Ⅲ区包含層出土遺物		第257図	1099-O P 平面・断面図(1/40),	
	(1/4)	251		1021-O B 出土遺物(1/6)	
第243図	奈良時代Ⅳ区包含層出土遺物			265
	(1/4)	252	第258図	1021-O B 平面・断面図(1/80)	
第244図	平安時代全体図(1/3000)			266
	255	第259図	1021-O B 出土遺物(1/4)	
第245図	平安時代遺構配置図(1/800)			266
	256	第260図	395-O B 平面・断面図(1/80)	
第246図	658-O B 平面・断面図(1/80)			267
	256	第261図	平安時代Ⅱ区柱穴出土遺物(1/4)	
第247図	440-O B, 457-O F 平面・			269
	断面図(1/80).....	257	第262図	848-O O 平面・断面図(1/80),	
第248図	440・663-O B 出土遺物			出土遺物(1/4)	269
	(1/4)	257	第263図	568-O X 堆積範囲(1/160)	
第249図	475-O B 平面・断面図(1/80)			270
	259	第264図	568-O X 出土遺物 1 (1/4)	
第250図	172-O B 平面・断面図(1/80)			271

第265図	568-O X 出土遺物 2 (1/4) …………… 273	第281図	IV区133-O S 平面(1/800)・ 断面(1/80)図…………… 290
第266図	平安時代 II区 包含層出土遺物 1 (1/4) …………… 275	第282図	平安末～鎌倉時代 I・II区 包含 層出土遺物 1 (1/4) …………… 292
第267図	平安時代 II区 包含層出土遺物 2 (1/4) …………… 276	第283図	平安末～鎌倉時代 I・II区 包含 層出土遺物 2 (1/4) …………… 293
第268図	平安時代 III・IV区 包含層出土遺物(1/4) …… 277	第284図	平安末～鎌倉時代 III区 包含層 出土遺物(1/4) …………… 294
第269図	平安時代 包含層出土遺物 陶磁器(1/4) …………… 277	第285図	平安末～鎌倉時代 IV区 包含層 出土遺物 1 (1/4) …………… 295
第270図	平安時代 包含層出土遺物 その他の遺物(1/4) …… 279	第286図	平安末～鎌倉時代 IV区 包含層 出土遺物 2 (1/4) …………… 296
第271図	包含層瓦分布状況, 出土遺物 (1/4) …………… 280	第287図	平安末～鎌倉時代 包含層 出土遺物 火打金(1/4) …………… 297
第272図	平安末～鎌倉時代 全体図 (1/3000)…………… 283	第288図	平安末～鎌倉時代 包含層 出土遺物 陶磁器(1/4) …… 298
第273図	235-O S, 287-O P 出土遺物 (1/4) …………… 284	第289図	時期不明・その他 遺構全体図(1/3000)…………… 301
第274図	235-O S 平面(1/500)・ 断面(1/40)図…………… 285	第290図	IV区中・近世水田(1/400) …………… 303
第275図	638-O B 平面・断面図(1/80) …………… 286	第291図	6・13-O B 平面・断面図 (1/80)…………… 304
第276図	638-O B 出土遺物(1/6) …… 286	第292図	50・60-O B 平面・断面図 (1/80)…………… 305
第277図	191-O O, 287-O P 平面・断面図(1/40)…………… 287	第293図	91-O B 平面・断面図(1/80) …………… 306
第278図	286-O W 平面・断面図(1/40) …………… 288	第294図	764-O B 平面・断面図(1/80) …………… 307
第279図	286-O W 出土遺物(1/4) …… 289	第295図	618・619-O B 平面・断面図 …………… 307
第280図	III区92・133-O S 平面(1/400)・ 断面(1/40)図…………… 290		

	(1/80)……………	308	第309図	平安末～鎌倉時代 出土遺物分布状況(1/1600) ……………	321
第296図	650—O P 出土遺物(1/4)…	308	第310図	平安末～鎌倉時代 陶磁器分布状況(1/2000)…	322
第297図	578—O B 平面・断面図 …	309	第311図	窯跡及び周辺遺跡 I 型式 1～2 段階(1/25000) ……………	326
第298図	578—O P 出土遺物(1/4)…	309	第312図	古墳時代建物配置図(1/1000) ……………	335
第299図	525—O B 平面・断面図(1/80) ……………	310	第313図	古墳時代建物分類図……………	336
第300図	519—O B 平面・断面図(1/80) ……………	311	第314図	奈良時代建物配置図(1/1000) ……………	339
第301図	503—O B 平面・断面図(1/80) ……………	311	第315図	奈良時代建物分類図(住居) ……………	340
第302図	34—O B 平面・断面図(1/80) ……………	312	第316図	奈良時代建物分類図(倉) ……………	341
第303図	時期不明建物(1/160) ……	312	第317図	平安時代建物配置図(1/1000) ……………	343
第304図	時期不明包含層出土遺物 (1/4, 2/3)……………	314	第318図	平安時代建物分類図……………	344
第305図	韓式系土器分布状況(1/1600) ……………	316	第319図	平安末～鎌倉時代建物配置図 (1/2000)……………	347
第306図	古墳時代出土遺物分布状況 (1/1600)……………	318	第320図	和泉國大島郡内郷域推定図 (1/80000) ……………	352
第307図	奈良時代出土遺物分布状況 (1/1600)……………	319			
第308図	平安時代出土遺物分布状況 (1/1600)……………	320			

図 版 目 次

巻頭図版 1	大庭寺遺跡出土の 初期須恵器群	1989年度調査 遺跡遠景 (東から)
巻頭図版 2	1988年度調査 II 区 938—O O (南から)	巻頭図版 3 1988年度調査 I 区 A (北から)

	1989年度調査 I区B (南から)		(南から)
巻頭図版4	1988年度調査 II区 (東から)		IV区D 弥生時代遺構北半 検出状態(南から)
	1988年度調査 IV区B (北から)	図版14	IV区D 12-OS他近景 (南から)
図版1	I区A 全景(上が東)		IV区D 15-OS他近景 (南から)
図版2	I区B 全景(上が北)	図版15	IV区D 14-OS近景(南から)
図版3	II区 全景(上が北)		IV区D 10-OS断面
図版4	III区A 全景(上が西) III区B 全景(上が西)	図版16	IV区D 5-OS断面 II区 1081-OD(東から)
図版5	IV区A・B 全景(西から) IV区C 全景(上が南)	図版17	II区 1081-OD(北から) I区A 295-OO(北から)
図版6	IV区D 全景(東から) V区 全景(上が北)	図版18	I区A 295-OO(西から) I区A 295-OO遺物
図版7	II区南壁断面 II区東壁断面 II区東壁断面		出土状態(北から) I区A 295-OO遺物 出土状態(南から)
図版8	III区A南東壁断面 III区B東壁断面	図版19	I区A 296-OO(南から) I区A 296-OO(北から)
図版9	IV区A 西壁断面 IV区B(橋脚部分)北壁断面	図版20	I区A 111-OS(北から) I区A 111-OS遺物
図版10	IV区D 北西壁断面 V区 西壁断面(南側)		出土状態(東から)
図版11	III区 遠景(北から) III区B 94-OD(西から)	図版21	II区 601-OS(西から) II区 601-OS作業風景 (西から)
図版12	III区B 94-OD遺物出土状態 (西から) III区B 94-OD断面	図版22	II区 601-OS(東から) II区 601-OS(南から)
図版13	IV区D 弥生時代遺構全景	図版23	II区 601-OS(北から) II区 601-OS(西から)

- | | | | |
|------|-------------------------------------|------|--|
| 図版24 | II区 257-OS (北から) | | I区B 659-OB柱穴
(787-OP)断面 |
| | II区 257-OS (南から) | | |
| 図版25 | II区 190-OS (北から) | | I区B 741-OP
遺物出土状態 (南から) |
| | II区 190-OS (南から) | | |
| 図版26 | II区 1100-OS (西から) | 図版36 | I区B 570・578-OB
(北から) |
| | II区 1100-OS (南から) | | |
| 図版27 | II区 1075-OD (北から) | | I区B 570・578-OB
(東から) |
| | II区 1075-OD (北から) | | |
| 図版28 | I区A 掘立柱建物群 (上が東) | 図版37 | I区B 570-OB (688-OP)
I区B 570-OB柱穴断面 |
| | I区B 掘立柱建物群 (上が西) | | |
| 図版29 | II区 201-OB (南から) | | I区B 578-OB柱穴断面 |
| | II区 155-OB (南から) | | I区B 539-OB (上が北) |
| 図版30 | II区 127-OB (南から) | | I区B 539-OB柱穴断面 |
| | II区 230-OB (北から) | 図版38 | I区A 385-OB (西から) |
| 図版31 | II区 253-OB (北から) | | I区A 217-OP (東から) |
| | II区 253-OB付近 (北から) | 図版39 | II区 66-OP (南から)
II区 132-OO (東から) |
| 図版32 | I区A 36-OB (南から) | | |
| | I区B 掘立柱建物群
(南西から) | 図版40 | I区A 210-OO、309-OS
(東から) |
| 図版33 | I区B 840・859-OB
(東から) | | I区A 130-OO (南から) |
| | I区B 840-OB柱穴
(869-OP)断面 | 図版41 | I区B 888-OO
遺物出土状態 (東から) |
| | I区B 806-OB柱穴
(806-OP)断面 | | I区B 677-OO
遺物出土状態 (北から) |
| 図版34 | I区B 806・762-OB
(東から) | 図版42 | II区 1158-OO (北から)
II区 1158-OO (北から) |
| | I区B 806-OB(914-OP)・
765-OX (西から) | 図版43 | II区 938-OO (南から)
II区 938-OO (東から) |
| 図版35 | I区B 659-OB (西から) | 図版44 | II区 1025-OS、891-OO
(西から) |

	II区 1025-OS (南から)	図版57	II区 387-OB (北から)
図版45	I区A 375-OO、378・ 115-OS (東から)	図版58	II区 389-OB (南から)
	I区B 375-OS (東から)		II区 282・354-OB (北から)
図版46	I区A 114-OS (東から)	図版59	II区 354-OB (西から)
	I区A 378-OO (北から)		II区 282-OB (西から)
図版47	I区B 375-OS (南東から)	図版60	II区 370-OP (東から)
	I区A 57-OS (南から)		I区B 540・543-OS、 556-OB (西から)
図版48	II区 古墳時代溝群 (上から)		I区B 543-OS遺物 出土状態 (南西から)
	II区 古墳時代溝群 (西から)		
図版49	II区 484-OS (西から)	図版61	III区B 28-OB (北から)
	II区 484-OS (東から)		III区B 40-OP (西から)
	II区 550-OS (西から)	図版62	III区A 67-OP
図版50	I区B 936-OX (北から)		IV区B 奈良時代全景 (東から)
	II区 1125-OX (北から)	図版63	IV区C 170・191-OB (東から)
図版51	III区B 84-OS (北から)		IV区C 170-OB (北から)
	III区B 84-OS断面		
図版52	II区 166-OO (北から)	図版64	IV区B 61-OS断面
	IV区D 2・3・4-OS (南から)	図版65	IV区C 221-OS断面
図版53	II区 奈良時代掘立柱建物 B群全景 (北から)		II区 掘立柱建物A群全景 (東から)
	II区 奈良時代掘立柱建物B群 全景 (西から)	図版66	II区 掘立柱建物A群全景 (北から)
図版54	II区 630-OB (北から)		II区 40-OB (北から)
	II区 227・255-OB (北から)	図版67	II区 172-OB (東から)
図版55	II区 393-OB (南から)		II区 475-OB (西から)
	II区 428-OP (北から)	図版68	II区 848-OB (東から)
図版56	II区 393-OB (393-OP)		II区 1099-OP
	II区 408-OP	図版69	II区 55-OP
			II区 201-OP断面

	II区 183-OP断面	図版84	II区 1100-OS出土遺物
図版70	I区A 286-OW周辺 (北から)	図版85	A、II区 2005-OO出土遺物
	I区A 286-OW断面		B、II区 8-OS出土遺物
図版71	I区A 235-OS (南から)	図版86	C、II区 11-OS出土遺物
	II区 235-OS (西から)		A、II区 1075-OD出土遺物
図版72	III区A 235-OS (東から)		B、I区B 859-OB出土遺物
	III区A 235-OS断面		C、I区B 762-OB出土遺物
図版73	III区B 133-OS (西から)	図版87	D、I区B 840-OB出土遺物
	III区B 133-OS断面		A、I区B 806-OB出土遺物
図版74	IV区B 133-OS全景 (南から)		B、I区B 659-OB出土遺物
	IV区B 133-OS断面		C、I区A 36-OB出土遺物
図版75	A、III区B 94-OD出土遺物		D、I区B 570-OB出土遺物
	B、IV区D 11-OX出土遺物	図版88	E、I区B 539-OB出土遺物
	C、IV区D 12-OS、6-OS、 11-OX、15-OS、13-OX 出土遺物		F、I区A 66-OP出土遺物
図版76	IV区D 15-OS・包含層 出土遺物		A、I区A 385-OP出土遺物
図版77	I区A 295-OO出土遺物		B、I区A 43・276・148・159・ 143・292・144-OP、764-OB 出土遺物
図版78	I区A 296-OO出土遺物		C、I区B 882-OO・888- OO・796-OP・742-OP・ 765-OX・770-OP出土遺物
図版79	I区A 296-OO出土遺物	図版89	A、II区 230-OP出土遺物
図版80	A、I区A 296-OO 出土遺物		B、I区A 210-OO出土遺物
	B、II区 601-OS出土遺物		C、I区A 309-OS出土遺物
図版81	II区 601-OS出土遺物	図版90	D、I区A 130-OO出土遺物
図版82	A、II区 257-OS出土遺物		A、I区B 677-OO出土遺物
	B、II区 1100-OS出土遺物	図版91	B、II区 1158-OO出土遺物
図版83	II区 1100-OS出土遺物	図版92	II区 1158-OO出土遺物
		図版93	II区 938-OO出土遺物

図版94	A、II区 1025-OO出土遺物		E、IV区D 21-OX出土遺物
	B、I区A 116-OS出土遺物	図版106	II区 包含層出土遺物
	C、I区A 114-OS出土遺物	図版107	II区 包含層出土遺物
図版95	A、I区A 114-OS出土遺物	図版108	II区 包含層出土遺物
	B、I区A 378-OO出土遺物	図版109	II区 包含層出土遺物
図版96	A、I区A 115-OS出土遺物	図版110	II区 包含層出土遺物
	B、I区A 115-OS、	図版111	II区 包含層出土遺物
	378-OO出土遺物	図版112	A、IV区 近現代水田
図版97	A、I区A 115-OS、		B、V区 包含層出土遺物
	378-OO出土遺物		C、II区 包含層出土遺物
	B、I区A 375-OS出土遺物	図版113	A、I区A 157-OB出土遺物
図版98	I区A 375-OS出土遺物		B、III区B 111-OO出土遺物
図版99	A、I区B 942-OS出土遺物		C、I区B 543-OS出土遺物
	B、II区 1500-OS出土遺物		D、I区B 540-OS出土遺物
	C、II区 405-OS出土遺物		E、II区 794-OO出土遺物
	D、I区A 57-OS出土遺物		F、II区 428-OP出土遺物
	E、II区 484-OS出土遺物		G、I区B 658-OB出土遺物
図版100	II区484-OS出土遺物		H、I区B 556-OB出土遺物
図版101	II区484-OS出土遺物	図版114	奈良時代 II区包含層出土遺物
図版102	II区484-OS出土遺物	図版115	奈良時代 II区包含層出土遺物
図版103	A、II区 484-OS出土遺物	図版116	奈良時代 II区包含層出土遺物
	B、II区 892-OS出土遺物	図版117	奈良時代 II区包含層出土遺物
	C、II区 887-OS出土遺物	図版118	奈良時代 II区包含層出土遺物
	D、II区 550-OS出土遺物	図版119	奈良時代 II区包含層出土遺物
	E、I区B 765-OX出土遺物	図版120	奈良時代 II区包含層出土遺物
図版104	I区B 936-OX出土遺物	図版121	奈良時代 II区包含層出土遺物
図版105	A、II区 1125-OX出土遺物	図版122	奈良時代 IV区包含層出土遺物
	B、III区B 84-OS出土遺物	図版123	奈良時代 II・IV区包含層出土遺物
	C、IV区A 161-OO出土遺物		
	D、IV区D 2-OS出土遺物	図版124	平安時代 568-OX出土遺物

図版125	平安時代II区包含層出土遺物	図版129	平安末～鎌倉時代
図版126	平安時代II区包含層出土遺物		II・III・IV区包含層出土遺物
図版127	平安時代II区～IV区包含層出土遺物	図版130	平安末～鎌倉時代 IV区包含層出土遺物
図版128	I区A 286-OW、287-OP、 III区B 92-OS、II区包含層出土遺物	図版131	平安末～鎌倉時代 I～IV区包含層出土遺物

目 次

古墳時代		第10表	II区包含層奈良時代出土遺物構成表…………… 253
第1表	初期須恵器観察表(295-OO) …………… 174	平安時代	
第2表	初期須恵器観察表(296-OO) …………… 175	第11表	平安時代掘立柱建物一覽表 …………… 268
第3表	初期須恵器観察表(601-OS) …………… 177	第12表	568-OX土師器・ 黒色土器法量表…………… 272
第4表	初期須恵器観察表(257-OS) …………… 178	第13表	II区包含層平安時代土師器 法量表…………… 275
第5表	初期須恵器観察表(1100-OS) …………… 179	第14表	II区包含層平安時代出土遺物 構成表…………… 281
第6表	初期須恵器観察表(8-OS) …………… 181	平安末～鎌倉時代	
奈良時代		第15表	286-OW瓦器・土師器法量表 …………… 289
第7表	奈良時代掘立柱建物一覽表 …………… 219	第16表	II・III区包含層平安末～鎌倉時代 出土遺物構成表…………… 299
第8表	II区包含層奈良時代土師器 (杯・皿)法量表…………… 232	まとめ	
第9表	II区包含層奈良時代須恵器(杯) 法量表…………… 238	第17表	周辺遺跡須恵器構成比…………… 324
		第18表	大庭寺遺跡須恵器・韓式系土器 構成比(1)…………… 324

第19表	大庭寺遺跡須恵器・韓式系土器 構成比(2)……………	325	付章		350
第20表	周辺遺跡器種構成表(2)……	328	第28表	胎土分析試料対照表……	354
第21表	奈良時代包含層出土遺物構成比 ……………	331	第29表	R b - S r 分布表……	355
第22表	平安時代包含層出土遺物構成比 ……………	333	第30表	分析値……………	356
第23表	平安末～鎌倉時代包含層 出土遺物構成比……………	333	第31表	各母集団からのマハラノビスの 汎距離の二案……………	357
第24表	古墳時代掘立柱建物観察表 ……………	337	第32表	ジフェニルカルバジドによる 呈色スポットのR f 値と色調 ……………	360
第25表	奈良時代掘立柱建物観察表 ……………	342	第33表	ジチゾンによる呈色スポットの R f 値と色調……………	360
第26表	平安時代掘立柱建物観察表 ……………	345	第34表	大庭寺遺跡の柱穴掘方 (66-O P)出土の杯内の赤色顔 料物質の材質定量分析値…	362
第27表	古墳時代掘立柱建物一覧表				

付 図 目 次

付図 1	I 区遺構全体図(1/200)	付図 4	IV 区遺構全体図(1/400)
付図 2	II 区遺構全体図(1/400)	付図 5	大庭寺遺跡全体図
付図 3	III 区遺構全体図(1/200)		

第 I 章 調査に至る経緯

大庭寺遺跡は堺市大庭寺、小代地区に所在する。この地域は泉北丘陵の一面にあたり、周辺は陶邑古窯址群と呼ばれる窯跡群が連綿と築かれている。丘陵を分断するように流れる石津川の水系には陶邑深田遺跡・伏尾遺跡・小阪遺跡、更に下流には著名な四ツ池遺跡といった遺跡群が位置している。

今回調査した地点は過去に陶邑深田遺跡の範疇で捉えられていたが、この地点が石津川によって分けられることや少し距離が離れることなどから大庭寺遺跡の範疇で考えられるようになった。

日本道路公団の近畿自動車道と歌山線建設ルートがこの大庭寺遺跡や西接する野々井遺跡を通過することが明らかになったため、綿密な調査が必要となった。このため昭和61年11月～翌年2月にかけて大阪府教育委員会の指導のもと、石津川・和田川間の試掘調査を実施した。その結果、大庭寺遺跡では古墳時代の河川が検出されると共に奈良時代～中世の包含層が確認された。

以上の結果をもとに大阪府教育委員会が調査範囲を決定し、日本道路公団大阪建設局と協議のうえ、1987年5月から発掘調査を実施することとなった。

1987年度は沖積地部分を調査し奈良時代・中世の掘立柱建物群とそれを区画する大溝を検出した。貴重な遺構との府教委の判断から中世の面で調査を打ち切った。そのため、古墳時代の河川については一部調査したにとどまった。

1988年度は沖積地と丘陵の一部を調査した。前年度一町四方の区画を持つと予想され保存の契機となった大溝についてはこの年度の調査で新たな展開をみせた。下層の調査については府教委の前年度の判断に従って実施しなかった。

1989年度は88年度同様沖積地と丘陵部について調査した。更に追加調査としての橋脚部分と石津川対岸の橋脚予定地の試掘調査を実施した。

これまで3ヶ年の調査のなかで沖積地は一部を除いて下層を調査していない。そのため遺跡の下限については捉えているが、上限についてはその限りではなく、今後の大庭寺遺跡の課題として残されたといえる。

第II章 遺跡の地理的歴史的環境

大庭寺遺跡は、大阪府堺市の南西部、大庭寺・小代地区に所在する。堺市は大阪府のほぼ中央部にあたり、その市域は北辺を大和川に限られ、北西に大阪湾を望み、南を和泉山脈に続く泉北丘陵を含み、東は南から北に延びる丘陵の尾根沿いに南河内地方と接している。堺市の地形は、一般に南が高く北が低い。北部の大阪湾岸は砂堆とその後背湿地で形成され、南部は泉北丘陵を中心に標高80～200m程の丘陵地帯が北西に向かって緩く傾斜しながら段丘地形に続いている。そして丘陵と段丘を縫うように石津川とその支流が北流し、その流域に沖積地が形成されている。大庭寺遺跡は、石津川の中流域に所在する。

大庭寺遺跡はT.P.+35mほどの中位段丘上からT.P.+25mほどの沖積段丘・谷底平野にかけて広がっている。中位段丘は、石津川とその支流である和田川に挟まれている拇丘陵の延長にあたり、大庭寺付近から北へ石津川と和田川の合流地点付近まで広がっている。その標高はT.P.+20～45mである。大庭寺付近では中位段丘面と沖積段丘の間には5mほどの明瞭な段差があるが、約800m北の太平寺の付近から下流では段差が目立たなくなる。また、調査地付近の中位段丘は、調査地北側で現在濃登ノ池等の溜池になっている開析谷で刻まれている。この付近の沖積段丘は、石津川の本流によって形成されている。沖積段丘はまず豊田付近から深田・和田付近まで東岸に発達し、大庭寺のすぐ上流から太平寺付近までは西岸に発達する。陶器川と石津川の合流点付近では上流下流ともに東岸に発達し、石津川が上神（にわ）谷を蛇行する様子が見える。沖積段丘の標高は、豊田付近でT.P.+34.5m、大庭寺付近でT.P.+28.3m、陶器川との合流部付近でT.P.+20.7mで、^(註1)豊田・大庭寺間が約1500m、大庭寺・陶器川間が約1500mであり、傾斜は緩やかである。

尚、この沖積段丘の形成時期は、1987年度の当協会の大庭寺遺跡の調査において一部明らかになっている。^(註2)その成果によれば、沖積段丘の下層を古墳時代後半を通じて石津川が流れ、谷の中央部に弥生時代後期から古墳時代後半にかけての遺構面が存在しており、その後奈良時代には河道の位置が変わって段丘上が安定し住居などが建てられるようになった。また、鎌倉時代になっても建物群が存在し、更に施行時期は不明だが条里地割もこの地形上に見られる。このことから、奈良時代の前にはある程度安定し、今の地形に近い様相になっていたと考えられる。

さて、大庭寺遺跡は古代において「陶邑」と呼ばれていたといわれる須恵器の一大生産



第1図 調査地周辺地形分類図 (1/20000)

地の一角にあり、いわゆる初期須恵器や韓式系土器の出土量も多い。また、初期須恵器を焼いた窯で名高いTK73窯とは石津川を挟んで約1km北西にあたり、須恵器の集積地として知られる深田橋遺跡の約400m下流にあたる。さらに当遺跡の北約1.5kmには小阪遺跡や伏尾遺跡といった初期須恵器が多く出土した遺跡がある。このようにこの地は須恵器が焼かれ始めた頃から須恵器生産と関係が深かった遺跡と考えられる。^(註3)

大庭寺遺跡一帯は、律令制下では大鳥郡上神（かみつみわ・にわ）郷に属していたと考えられている。大鳥郡は石津川の支流を含めてその流域一帯を領域とし、和泉国唯一の大社である大鳥神社周辺に中心があったと考えられている。上神郷は太平寺から石津川本流の上流全域を含む。『新撰姓氏録』によられるこの郷内に蟠居していたと考えられる豪族は、神直・大庭造・神人・和田首があげられる。このうち特に大庭造は地名などからこの付近に居住し、大庭寺遺跡に関係が深いと考えられる。

また、奈良時代では、和泉國大鳥郡蜂田郷家原寺出身と伝えられる行基の布教活動が目される。『行基年譜』等によれば、行基は大鳥郡内で特に寺院建設や、溜池などを多数造っている。大庭寺遺跡付近でも天平勝寶二(750)年に行基への追善報恩の為に「大庭院」が建てられたと伝えられている。現在、大庭院の跡と伝えられる来迎寺という観音堂が残っている。今回の調査地とは濃登ノ池を挟んで対岸の集落内にある。そこに納められている十一面観音像は10世紀末から11世紀中頃のものとしてされている。

鎌倉時代には上神郷に若松庄が成立する。当時の本家は仁和寺であったという記録がある。また、南北朝期には南朝北朝の勢力争いに若松庄も巻き込まれ、河内の悪党楠木正成により押妨されたと伝えられている。^(註4)

大庭寺遺跡の位置、環境および周辺の遺跡の内容については、先の報告書に既述されている。今回の報告内容の不足な点は先の当遺跡報告書を参照されたい。^(註5)

註釈及び参考文献

註1 地形等の特徴については以下の報告書を参考にした。

1. 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘報告書Ⅰ』 1984 (財)大阪文化財センター
2. 『堺市文化財調査報告 第17集 鈴の宮Ⅳ』 1984 堺市教育委員会
3. 『平井遺跡発掘調査報告書』 1988 (財)大阪府埋蔵文化財協会

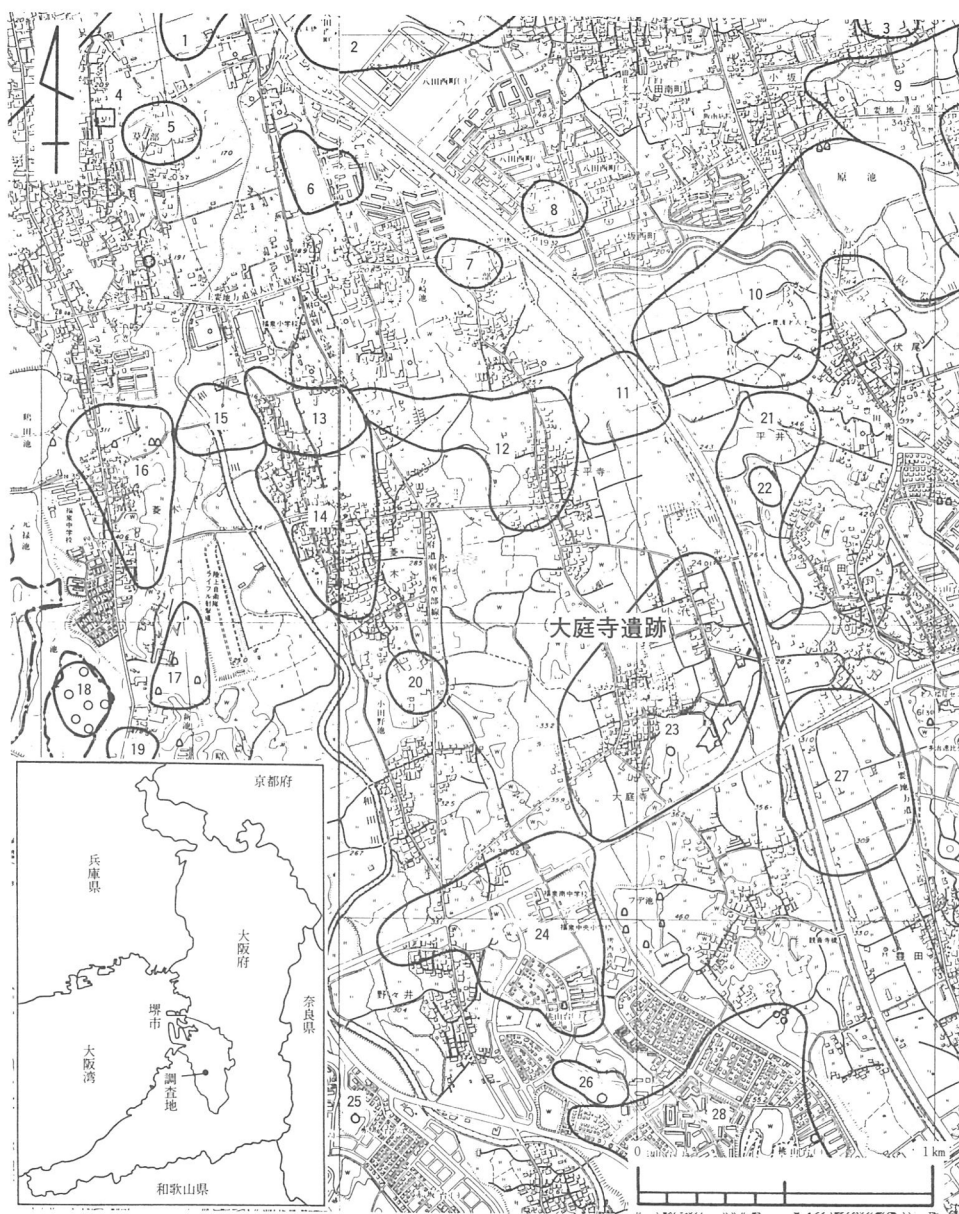
註2 『大庭寺遺跡発掘調査報告書』 1988 (財)大阪府埋蔵文化財協会

註3 『小坂遺跡調査概要』 その1～その7 1986～1988 (財)大阪文化財センター

註4 文献資料等については以下を参考にした。

1. 『角川日本地名大辞典 27 大阪府』 1983 角川書店
2. 『日本歴史地名体系 28 大阪府の地名Ⅱ』 1986 平凡社
3. 『堺市史統編 1』 1791 堺市教育委員会

註5 註2参照。



- | | | | |
|-----------|-----------|------------|------------|
| 1. 上遺跡 | 8. 八田西町遺跡 | 15. 西浦橋遺跡 | 22. 小代古墳群 |
| 2. 鈴の宮遺跡 | 9. 平井遺跡 | 16. 鶴田池東遺跡 | 23. 野園池古墳 |
| 3. 東八田遺跡 | 10. 小阪遺跡 | 17. 山田北遺跡 | 24. 野々井遺跡 |
| 4. 日部神社本殿 | 11. 大平寺遺跡 | 18. 山田古墳群 | 25. 野々井古墳 |
| 5. 草部遺跡 | 12. 万崎池遺跡 | 19. 山田遺跡 | 26. 野々井南遺跡 |
| 6. 万崎遺跡 | 13. 万崎遺跡 | 20. 菱木上遺跡 | 27. 深田橋遺跡 |
| 7. 万田遺跡 | 14. 菱木遺跡 | 21. 伏尾遺跡 | 28. 牛石古墳群 |

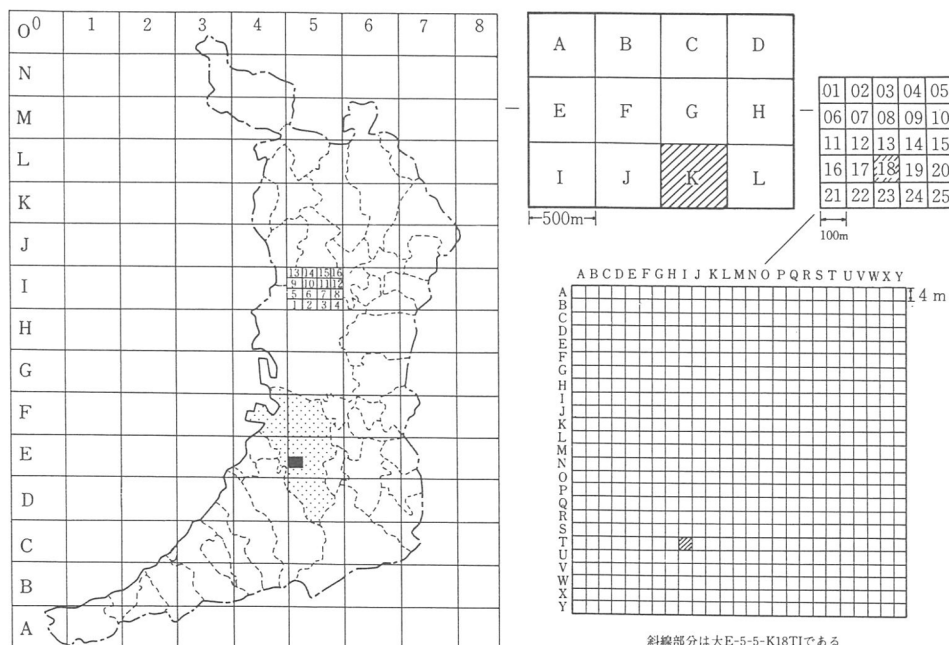
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

第三章 調査の概要

第1節 調査の方法

調査地は、水路、里道などによって分割された上、調査年度によって入り組んだ状態であるため、便宜的に第3図のように調査区を設定し、調査を行った。A調査区・B調査区・C調査区については既に報告済みである。調査区内の遺跡の位置・地区割りは、(財)大阪府埋蔵文化財協会の調査規定に従い、上記の調査区と併用して適宜表示した。

地区割りの呼称は、新版2,500分の1の大阪府都市計画地形図（以下、都市計画地形図と略称する。）のX軸（東西方向）、Y軸（南北方向）に基づき、都市計画地形図の500m四方の区画をA～Lで呼称し、この区画を25等分した100m四方の区画を01～25までの数字で示す。これを更に縦横25分割し、4×4mの区画を作り（第3図）、南北方向を先に、東西方向を後にして、行列を大文字のアルファベット（A～Y）で呼称・表記し、5桁の記号で示した。今回の調査対象地は、都市計画地形図の大E-5-5にあたる。



第3図 調査地区割模式図

第2節 これまでの調査

1986年度の調査概要（第4図参照）

この年は近畿自動車道と歌山線建設予定に伴い、堺市南西部の小代地区から檜尾地区まで、全長約3kmに81箇所のグリットを設定し試掘調査を行った。調査対象地は起伏に富み、北向きに流れる石津川とその支流の和田川の沖積地（1987年度報告では旧氾濫原、以下同じ）や、この両河川に挟まれた母丘陵と、和田川西岸の信太山丘陵の一部を東西に横断する形になった。調査対象地内周辺の遺跡として野々井遺跡・大庭寺遺跡があり、当年度の調査結果もほぼ全域で遺構・遺物を確認している、今回の調査報告対象地である、石津川付近から濃登ノ池までの地区にはNo.91～110（93、94、96、107、108欠番）の15トレンチを配置した。No.91～97は丘陵上にあたり（T.P.+33～34m）、耕土直下で溝、ピットを検出したほか、古墳時代後期や奈良時代の須恵器等が出土した。No.98～100は丘陵斜面にあたり（T.P.+29～33m）、古墳時代～中世の遺物包含層（厚さ10～40cm）と溝、ピットを確認した。No.101～110は石津川の沖積地にあたり（T.P.+27～29m）、古墳時代～中世の遺物包含層（厚さ10～60cm）や、奈良時代のピット、古墳時代の河道を確認した。



第4図 1986年度 調査地位置図 (1/5000)

1987年度の調査概要（第5図参照）

前年度の試掘に基づき、この年、石津川西岸の沖積地部分の調査が行われた。

その主要な成果を時代順にあげれば、縄文時代では当時の石津川の河道、縄文土器を含む不定形の落ち込みを数箇所確認している。弥生時代では、中期の土器を含む溝や後期の竪穴住居址1棟を検出した。古墳時代では、前期の井戸、人形の線刻を持つ木製品が出土した溝、大型甕・壺・杯類など多数の須恵器が集中して出土した土器溜まり、須恵器などが出土した幅約60mの石津川の旧河道などがある。旧河道からは多数の初期須恵器が出土し、「陶邑」を考えるうえで貴重な資料を提供した。

さらに、奈良時代・鎌倉時代では集落址が確認された。奈良時代では、倉庫2棟を含む掘立柱建物12棟、建物群に付属する木組みの井戸1基、井戸の中からは、「上」・「清水」・「水」と読める墨書土器などが出土している。建物群付近からは円面硯・風字硯も出土している。鎌倉時代では、調査区中央付近で竈を付属施設としてもつ掘立柱建物、中小の溝に区画された数棟の掘立柱建物群、さらにこれらの建物を囲む形で「コ」の字状に検出された、環濠の可能性が考えられている幅2m前後の大溝がある。また、曲げ物を井戸側に使った井戸が2基、瓦器 椀・羽釜などが多数出土した土坑などがある。

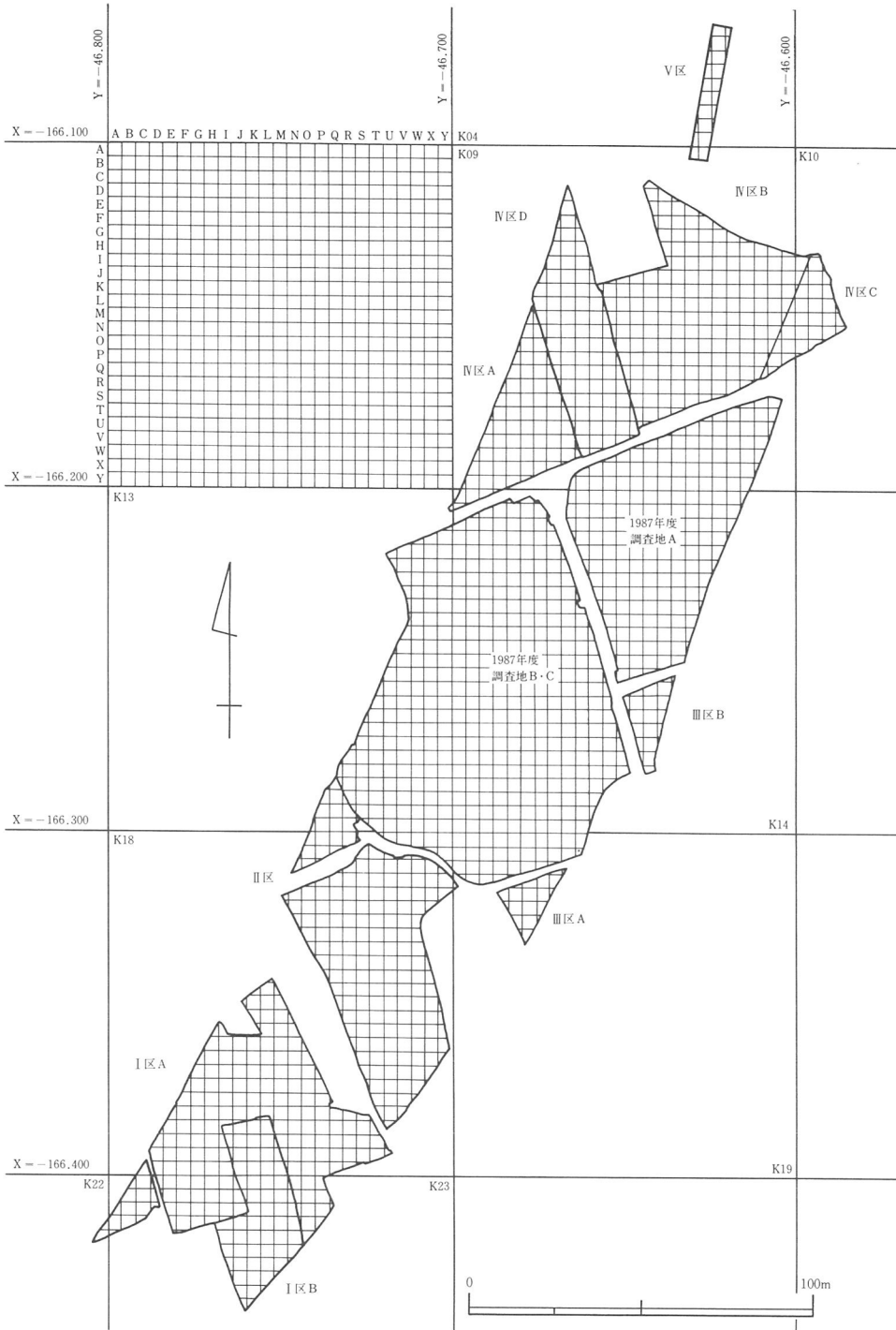
発掘調査途中の段階で奈良時代と鎌倉時代の集落址の内容が明らかになり、既に石津川の旧河道まで調査した以外の部分を、奈良・鎌倉時代の遺構面で保存した。

第3節 調査のあらまし

大庭寺遺跡の調査は、1986年度（試掘調査）・1987年度・1988年度・1989年度にわたって行われてきた。本書報告分の1988年度・1989年度の調査は第5図のⅠ～Ⅴ地区を行った。1987年度がⅠ区A、Ⅱ区、Ⅲ区A・B、Ⅴ区、調査面積は9200㎡である。1989年度がⅠ区B・Ⅳ区D、調査面積2000㎡である。ここでは、各調査区ごとに代表的な遺構について紹介しながら概要を述べる。

Ⅰ区A（1988年度調査、第6図、図版1参照）

石津川西岸に延びる梅丘陵の頂上部（T.P.+33.3～33.4m付近）から丘陵斜面にかかる場所である。これまでの調査地区で最も南西にあたる地区で、調査面積は2640㎡である。調査の結果、古墳時代・奈良時代、平安末～鎌倉時代の遺構・遺物が出土している。



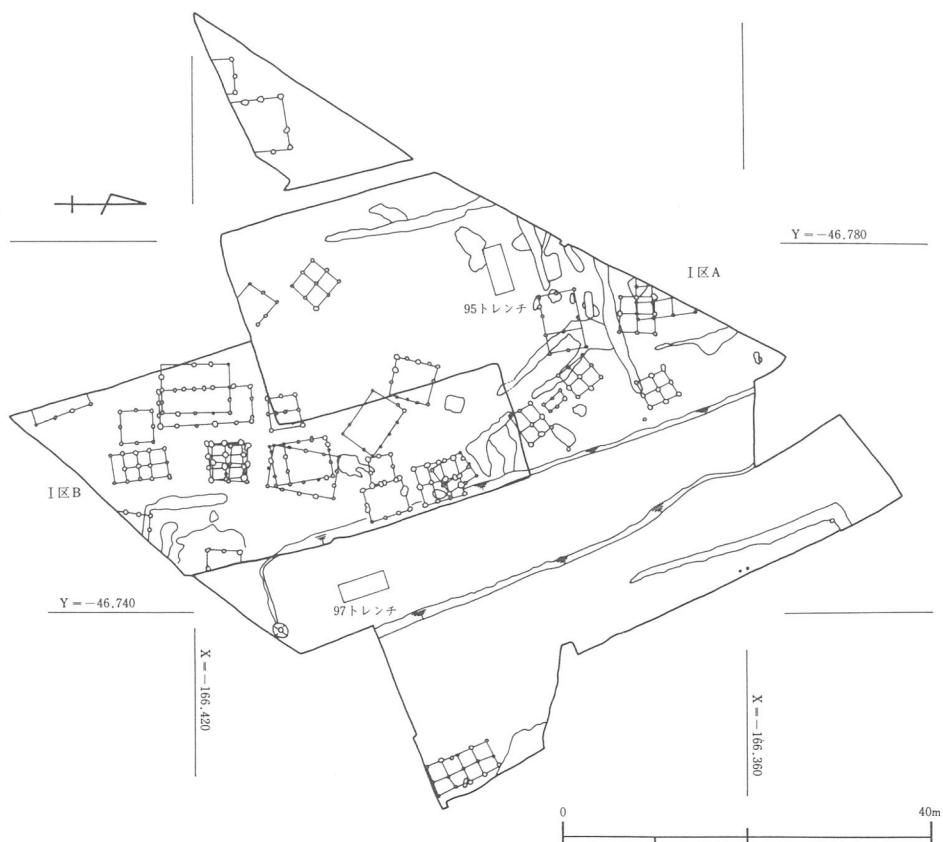
第5図 調査地地区割全体図(1/2000)

古墳時代は、5世紀代の土坑・溝が数ヵ所、5世紀末～6世紀中頃の掘立柱建物7棟・土坑・溝がやはり数ヵ所検出されている。土坑・溝からは、多くの土器が出土しているが、なかでも5世紀代の初期須恵器・韓式系土器を出土した295-00・111-0Sの一群は注目される。この他、296-00は斜面に掻き落とされた土砂に溜った土器群であるが埋没時期は後世と考えられる。しかし出土土器の一群には注目されるものが多い。

5世紀末～6世紀中頃の掘立柱建物は2間×2間の総柱建物が多くI区Bにさらに広がっている。調査区の中では建物は北東側に集中する傾向が見られる。

奈良時代は掘立柱建物1棟と須恵器・瓦・瓦埴などの遺物が出土している。掘立柱建物(157-0B)の北端の柱穴には長頸壺が据えられていた。平安時代は掘立柱建物1棟、平安末～鎌倉時代は丘陵斜面に沿って走る用水溝や井戸などが検出された。

調査区は丘陵頂上部ということもあって、後世にかなり削平されていた。特に西側が激



第6図 I区A・B全体概要図(1/800)

しく、検出された柱穴・溝などの遺構は総じて浅くしか残っていなかった。更に、丘陵斜面にも遺構の広がりは見られたと思われるがやはり後世の開墾によって失われたと思われる。

I 区 B (1989年度調査、第 6 図、図版 2 参照)

I 区 A と同一地点で、北へ延びる尾根状丘陵の東縁辺部にあたる平坦面に位置する。高さは T.P. +33.5m 前後で、調査面積は約 750m² である。検出された遺構は古墳時代と奈良時代が主であり、集落に関わるものである。掘立柱建物は 16 棟を数え、その柱穴は円形のもものが主流である。

古墳時代の遺構は 6 世紀代（古墳時代 II 期—後述）の掘立柱建物・溝・土坑・落ち込みなどで、建物は 7 棟以上あり、そのうち総柱建物と、南妻に廂をもつ建物が各 1 棟ある。また桁行 5 間に及ぶ建物もある。その他の遺構（溝・土坑・落ち込みなど）も同じような時期である。出土した須恵器から概ね II 型式第 2～4 段階頃と思われるが、一部は 7 世紀まで降るかもしれない。

奈良時代の遺構も 2 棟以上の掘立柱建物や溝などである。調査地南東の 2 条の溝のうち、1 条は東から北へ直角に曲がっており、他の 1 条も削平で失われているとはいえ、同様の形跡が認められたことから、これらは平行する溝であったと考えられる。道路部分または土手状の盛り土の側溝かと思われる。

以上の遺構は遺物・切合い関係などから時期を判断したが、そうした手がかりが得られず時期不明とせざるを得ない掘立柱建物も数棟存在する。これらには古墳または奈良時代のいずれかに属するものがあると思われる。また後世の削平がかなり著しかったようで、建物として組み合わないままの柱穴がかなり多数にのぼっている。

遺物は須恵器が大多数で、土師器も少なくないが、総じて残りが良くない。初期須恵器の破片も多いがその殆どはより新しい土器と混って出土しており、古墳時代 I 期（後述）に遡る遺構は検出されていない。

II 区 (1988年度調査、第 7 図、図版 3 参照)

今回報告の調査地区中最も成果のあった地区である。I 区の斜面下に繋がる地区で、T.P. +27.6～30.6m 付近で、調査面積 2950m² である。調査区は西から東に傾斜する地形で、I 区の丘陵頂上部からの土砂が厚く堆積していた。調査の結果、古墳時代・奈良時代・平

安時代中頃・平安末～鎌倉時代にかけての遺構・遺物が出土した。

古墳時代は5世紀代の竪穴住居址1棟・土坑・溝、5世紀末～6世紀代の竪穴住居址1棟、掘立柱建物、土坑・溝・甕棺などがある。遺物についても多くの成果を得たが、5世紀代の遺構からは、やはり初期須恵器や韓式系土器が出土している。特に、601-OS・1100-OS・257-OS・8-OSなどの遺構はまとまった一括資料として注目される。この他、初期須恵器・韓式系土器は包含層からも多量に出土している。

5世紀代の遺構は、1棟の竪穴住居址と前述の土坑・溝などである。

5世紀末～6世紀代の遺構は竪穴住居址1棟・掘立柱建物3棟・土坑・溝などがある。竪穴住居址は(1075-OD)1辺7.6m前後の大型住居址である。掘立柱建物は丘陵上の集落の周辺地域にあたるためか3棟が点在するのみである。484-OSとこれに並行してある何本かの溝は集落の内と外を画するものと思われる。1025-OOは1987年度調査B地区で出土した土器溜まりの丘陵側の続き部分である。甕棺(938-OO)は484-OSが埋められた後に埋葬されたもので、6世紀後半になると思われる。このことから、6世紀後半まで規模は縮小するもののこの地区では集落の痕跡が認められることが明らかである。

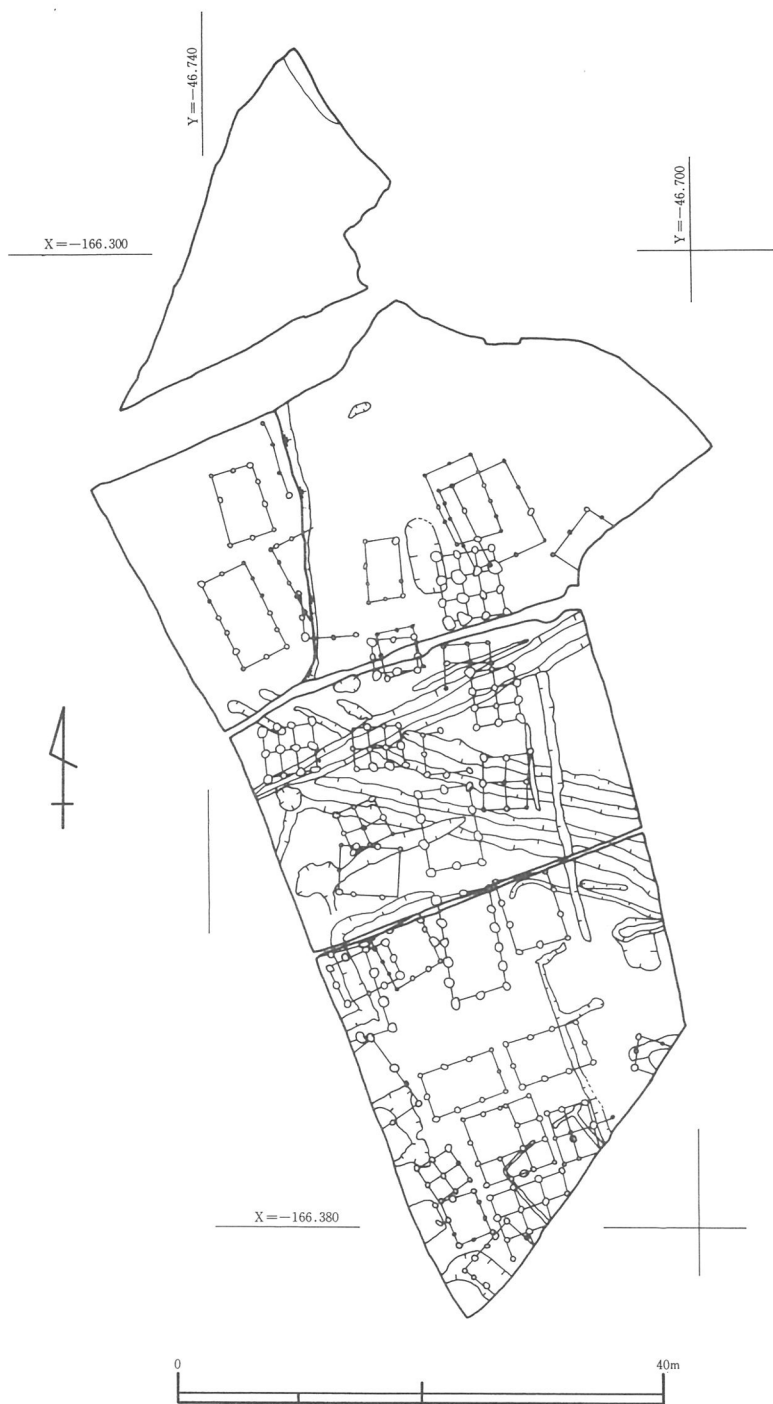
奈良時代の集落は掘立柱建物19棟からなるもので何期かに渡って営まれたと考えられる。同時期に存在した1群を観察すると、屋(側柱建物)2棟・倉4棟程度の集落であったと思われる。倉の中では630-OBが3間×3間の大型で、集落内の位置も特異なものとして注目される建物である。遺物は奈良時代中頃のものが多く、集落の盛行した時期が奈良時代中頃であったことを示している。

平安時代は掘立柱建物9棟からなる。北地区(3棟)と南地区(6棟)の2地区に大きく分かれる。建物は3間×3間で平面正方形の構造のものが登場している。土師器・黒色土器・須恵器・越州窯青磁・灰釉などが出土した。

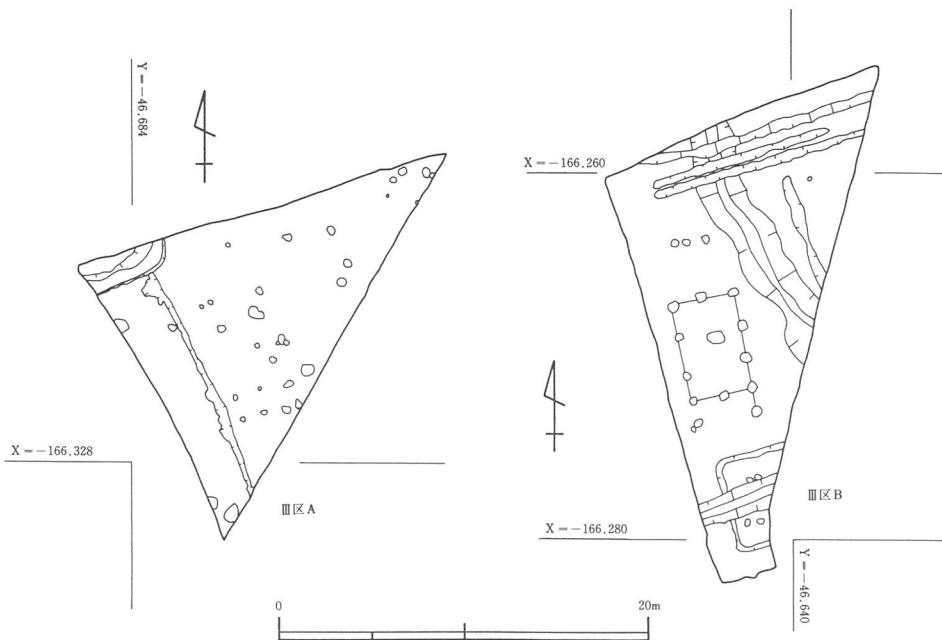
平安末～鎌倉時代は用水溝と掘立柱建物1棟がある。この時期はII区については遺構・遺物共に希薄であった。丘陵頂上部からの土砂は遺構面上に厚く堆積していたことは述べたが、これらの土砂の上層は近世以降の水田開発による盛り土である。下層のものは奈良時代～鎌倉時代の集落を造成するための整地土と考えられる。

III区A(1988年度調査、第8図、図版4上参照)

1986年度調査のC区南側に位置する地区で古墳時代以前は石津川の旧河川であった場所である。調査面積は195㎡。遺構保存のためT.P.+26.80m付近の中世遺構面より下層は、



第7図 II区全体概要図 (1/600)



第8図 III区A・B全体概要図(1/400)

遺構に影響のない部分でトレンチ調査を行ったのみである。

調査の結果、奈良時代の柱穴群や、平安末～鎌倉時代の用水溝などが検出された。

奈良時代の柱穴群は調査区の制約もあって建物となるものはなかった。柱穴には、土器の破片を入れたもの、柱材(67-OP)の遺存したものなどがあつた。平安末～鎌倉時代初めの用水溝はコーナーが検出され、断面には溝の側板の痕跡が観察された。

III区Aは遺物の出土量が少なく、奈良時代集落(A群)や平安末～鎌倉時代の集落の周辺部にあたる場所と考えられる。

III区B(1988年度調査、第8図、図版4下参照)

III区Aと同じく、C区東側に隣接する調査区である。この調査区は遺構面保存のためにT.P.+27.2m前後で調査を終了した。調査の結果、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安～鎌倉時代初めの遺構・遺物が検出された。

弥生時代は後期の竪穴住居址(94-OD)が調査区の南端より検出された。検出されたのは住居址の2分の1で、大庭寺遺跡では弥生時代の住居址は2例目である。

古墳時代は南北に流れる溝(84-OS)が検出された。溝は5世紀代～8世紀代まで少

しずつ埋まりながら流れていたようである。奈良時代は掘立柱建物1棟（28-O B）がある。柱穴には柱材が遺存しているものが多い他、周辺に長頸壺を据えた浅い土坑を伴うなど注目される。この建物はB区の掘立柱建物の東側に連なるもので、一連のものと考えられる。平安末～鎌倉時代初めは区画溝が調査区の南端に検出された。この他には溝1本があるのみで、建物の検出はなかった。

Ⅳ区A（1988年度調査、第9図、図版5上参照）

Ⅳ区は石津川の氾濫原にあたり、1987年度調査地区の北部隣接地になる。このうちA地区は最も西端にあたる。調査は平安末～鎌倉時代の遺構面保存のためT.P.+26.5m前後の深さで終了した。（Ⅳ区については全面にわたってこの高さで調査を終了した。）調査の結果、近世～現代にかけての水田面・畔・動物の足跡、中世と思われる溝・土坑、そして中世面に重なって部分的に検出された古墳時代（5世紀末～6世紀初め）の土坑がある。

Ⅳ区B（1988年度調査、第9図、図版5上参照）

Ⅳ区Bは、1987年度調査地区の平安末～鎌倉時代の区画溝の北部分にあたる場所である。調査の結果、古墳時代・奈良時代・平安末～鎌倉時代の遺構・遺物が検出された。

古墳時代は土坑・溝など、奈良時代は土坑・溝がそれぞれ見つかっている。奈良時代の遺構は調査区の東側Ⅳ区C区寄りに集中するもので、柱穴もいくつか見られた。

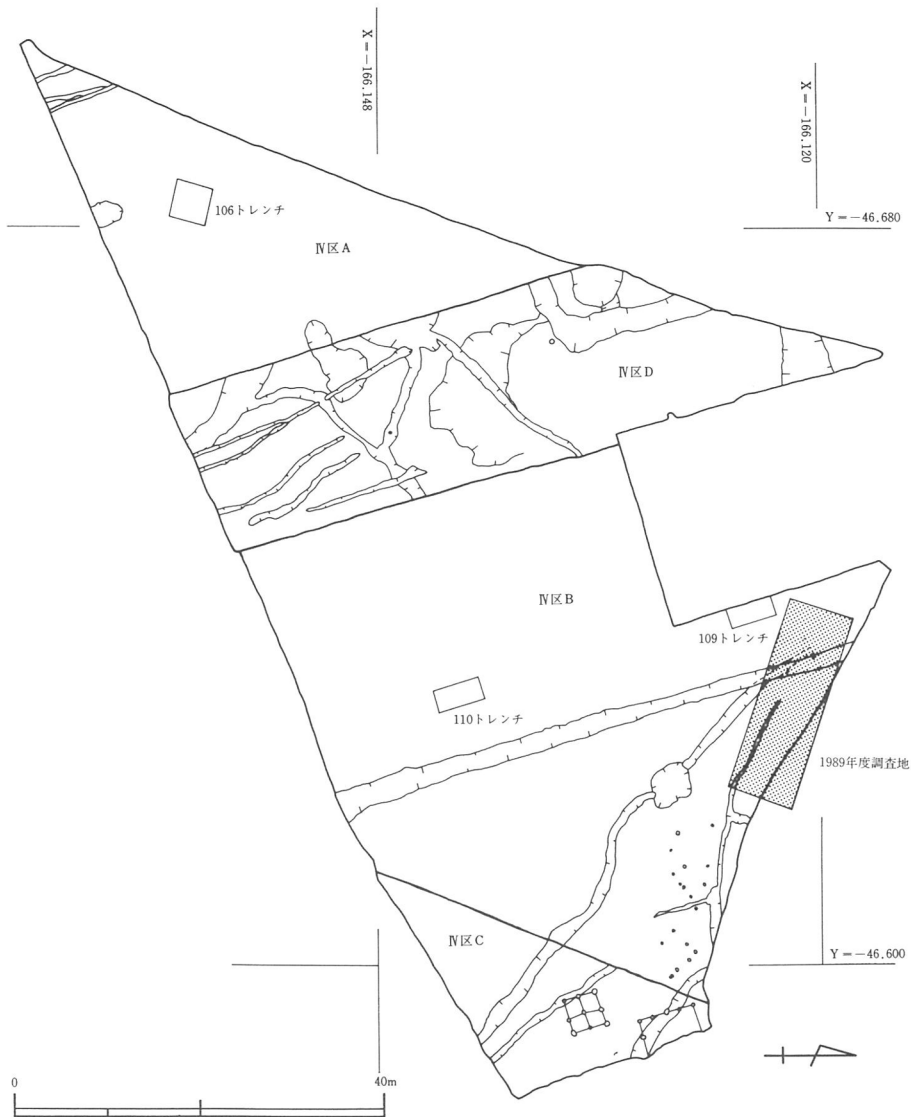
平安末～鎌倉時代は区画溝の検出があげられる。区画溝は当初調査区内で西に曲がり集落の北部を区画すると予想されていたが、調査の結果、さらに北に続き調査区内を縦断していた。更に、Ⅳ区の調査では平安末～鎌倉時代の遺構の検出はほとんど見られず、この時期の遺構の北への広がりには、1987年度調査区内に大半が納まる結果となった。

Ⅳ区B・橋脚部分（1989年度調査、第9図参照）

鎌倉時代の遺構面保存区域のうち、橋脚予定位置のみ下まで掘り下げ、奈良時代の溝などを検出した。近畿自動車道はこの位置より南には橋脚がなく、盛土で造成される。

Ⅳ区C（1988年度調査、第9図、図版5下参照）

石津川に隣接し、最も東にあたる地区で、三角形を呈する狭い調査区である。河川の影響で遺構は検出できないと考えられたが、奈良時代の溝や、それ以降の掘立柱建物2棟な



第9図 IV区A・B・C・D全体概要図 (1/800)

を検出した。しかし、遺物はほとんど出土していない。

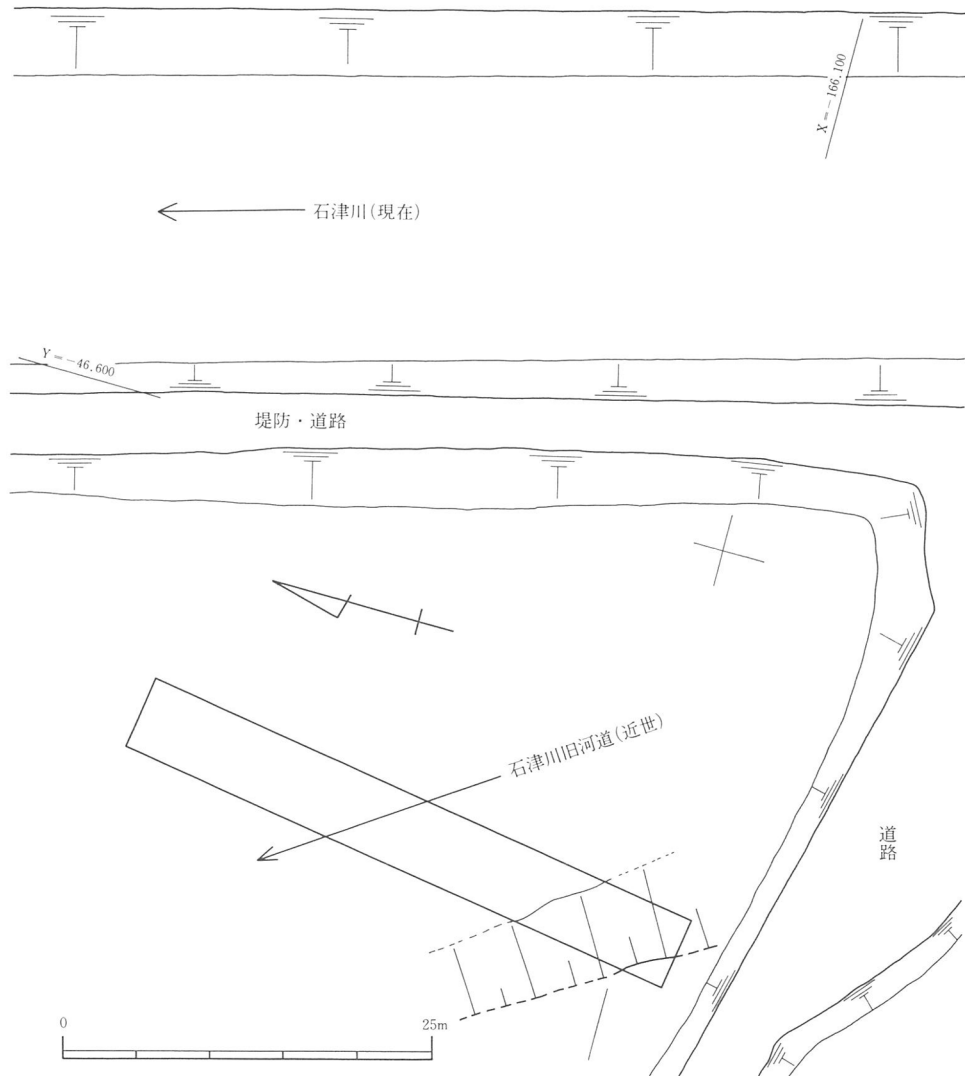
IV区D (1989年度調査、第9図、図版6上参照)

IV区A・Bの間にあたる地区で、現地表面の高さはT.P.+26.9m前後である。調査面積は約1250㎡である。IV区のうちこの地区のみ、鎌倉時代より下層について、弥生時代まで遡って調査した。沖積地にあたり、調査地全面に近世・中世の水田層が堆積していた。その下には古墳時代・弥生時代などの地層が存在し(第IV章、第1節参照)、古墳時代後

期と弥生時代中期の溝その他の遺構が検出されている。

V区（1988年度調査、第10図、図版6下参照）

石津川にやはり隣接する地区である。調査は鋼矢板の限界もあって地表下3.5mまでで終了した。（地表面はT.P.+約25.5m、調査はT.P.+約22.5mまで行った。なお、現在の石津川の水面はこの付近ではT.P.+24.5m前後である。）IV区とは間の市道を挟んで約10mの距離にあたる。この地区はIV区より低くなっており、現在の地形では市道北側が調査区に下る法面となり、調査区南から1mが傾斜変換点となっている。



第10図 V区全体概要図 (1/500)



第11図 1989年度 試掘調査地位置図 (1/5000)

さらに調査の結果、この傾斜が地表下に続いていることが調査区南際で検出された。この傾斜は沖積層を石津川が浸食してできたもので、沖積層は少なくとも縄文以前に形成されたものである。この沖積層の上に溜まった土からはT.P.+24.0mまでは近現代の遺物を含んでおり、最近まで石津川の氾濫によってえぐられていたことがわかった。この近現代の攪乱層より縄文後期の土器1個体が出土した。

その他

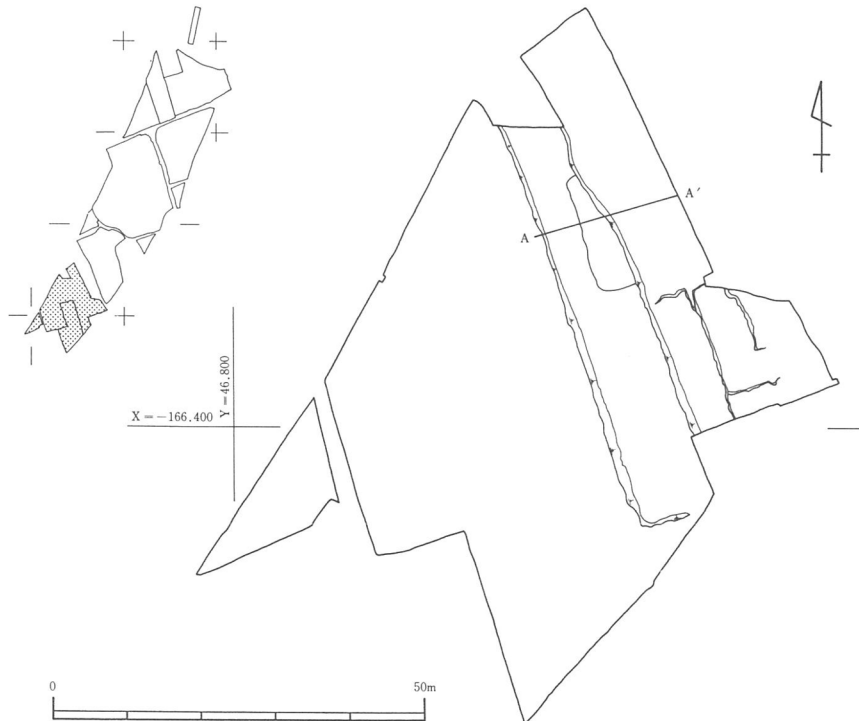
1989年度は第11図に示した位置で試掘調査を実施した。2地点とも橋脚予定位置で、各々約10㎡の試掘ピットを設け、現地表面から約2mまで掘削した。現代の地層が厚く、明治の2万分の一地形図と対照した結果、改修前の石津川の流路の一部にあると判断された。

第Ⅳ章 調査の成果

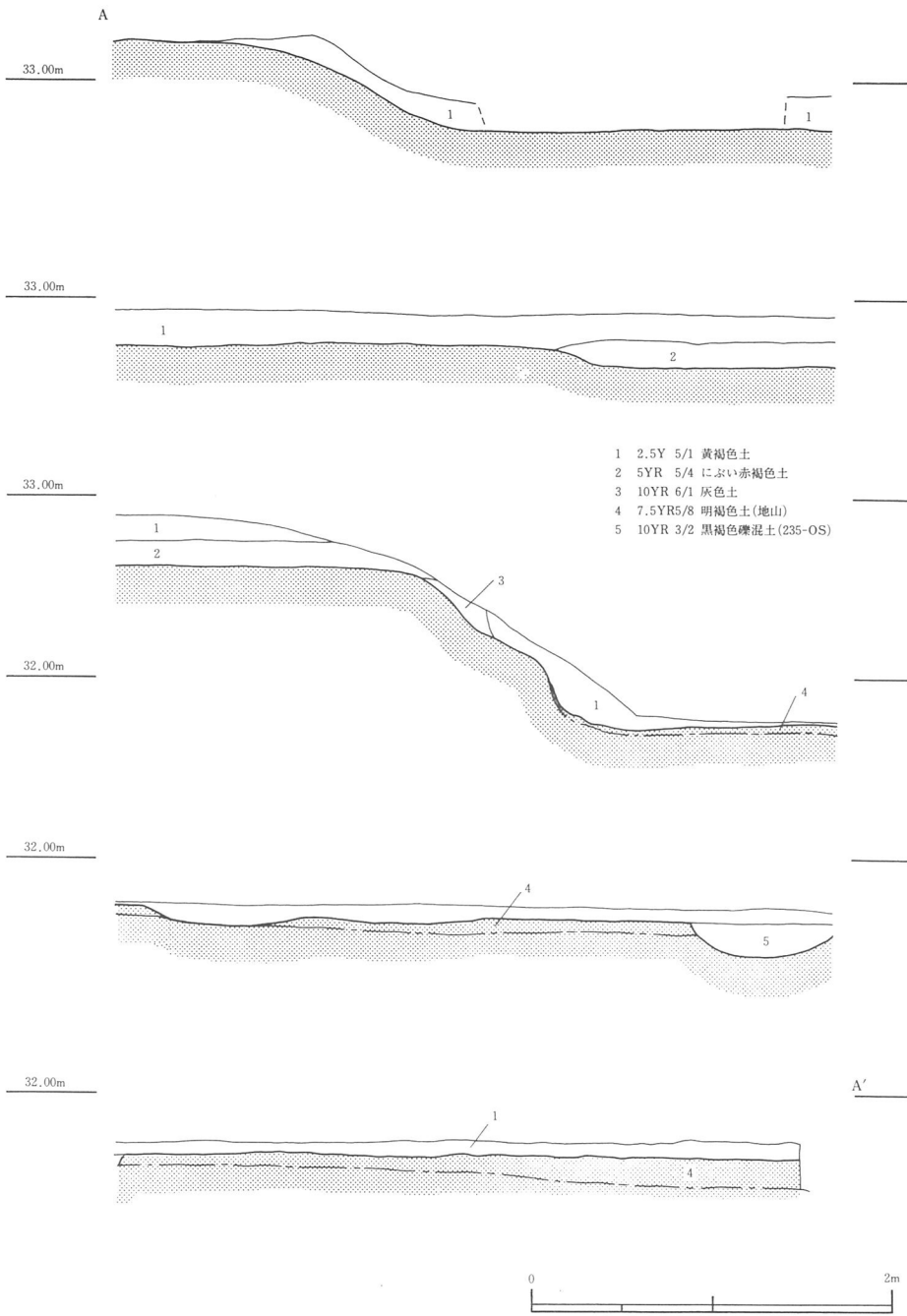
第1節 層序

I区（第12・13・20図参照）

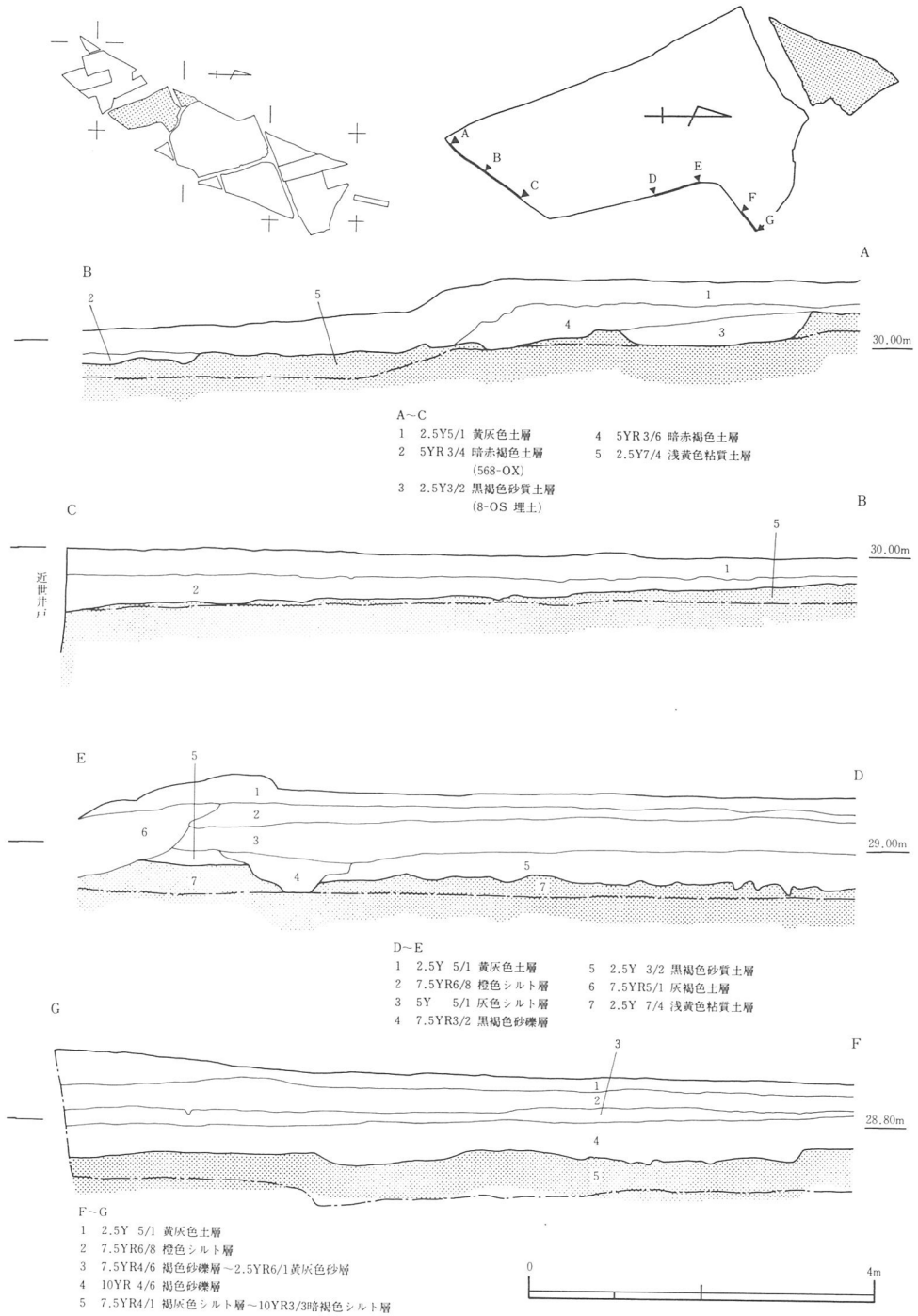
今回の調査地区内で、南西端の丘陵上から丘陵斜面部にかかる地区である。現地表面の高さは、T.P.+30.9～33.8mの範囲で、南西から北東に傾斜している。調査前の土地利用状況は、大部分が水田である。提示した土層断面図は、現在の耕作土を除去した後、斜面傾斜方向に平行になるようにK18S K～K18R Pにわたって任意に設定した土層観察用の畔である。土層は、現在の水田耕作土（厚さ約20cm）の他、床土を除くと洪積層の地山となり、部分的にある整地層以外は包含層と呼べる層はほとんどない。生活面が最上段から最下段まで4段あるのは、水田耕作等による削平と平坦面の造成によるものである。



第12図 I区土層断面位置図 (1/1000)



第13図 I区土層断面図 (1/40)



第14図 II区土層断面図 (1/40)

II区（第14・20図、図版7参照）

II区は丘陵から沖積地へつながる傾斜面に立地するため、土層は全体に西側に薄く、東側に厚く堆積していた。現水田面から地山までは西側で20cm、東側で100～110cmである。

しかし、全体に旧地形は一樣ではなく、北側（スクリーントーン部分）では表工直下10cmで地山を検出した。断面図A～C、D～Eで囲まれた部分は水田として利用されていた。

A～C周辺には断面図に観察される5YR3/4暗赤褐色土層（568-OX）が約50m²に渡って広がっていた。この土は平安時代の堆積層で近現代の堆積層の下に堆積していた。

D～Eは調査区の東端の奈良時代の集落周辺の堆積を示す。2.5Y5/1黄灰色土層、7.5YR6/8橙色シルト層は近現代の耕作土および堆積土である。5Y5/1灰色シルト層は平安末～鎌倉時代、2.5Y3/2黒褐色砂質土層は奈良時代に起源を持つそれぞれの堆積土と考えられる。黒褐色砂質土層には古墳時代～奈良時代の遺物が多量に出土した。

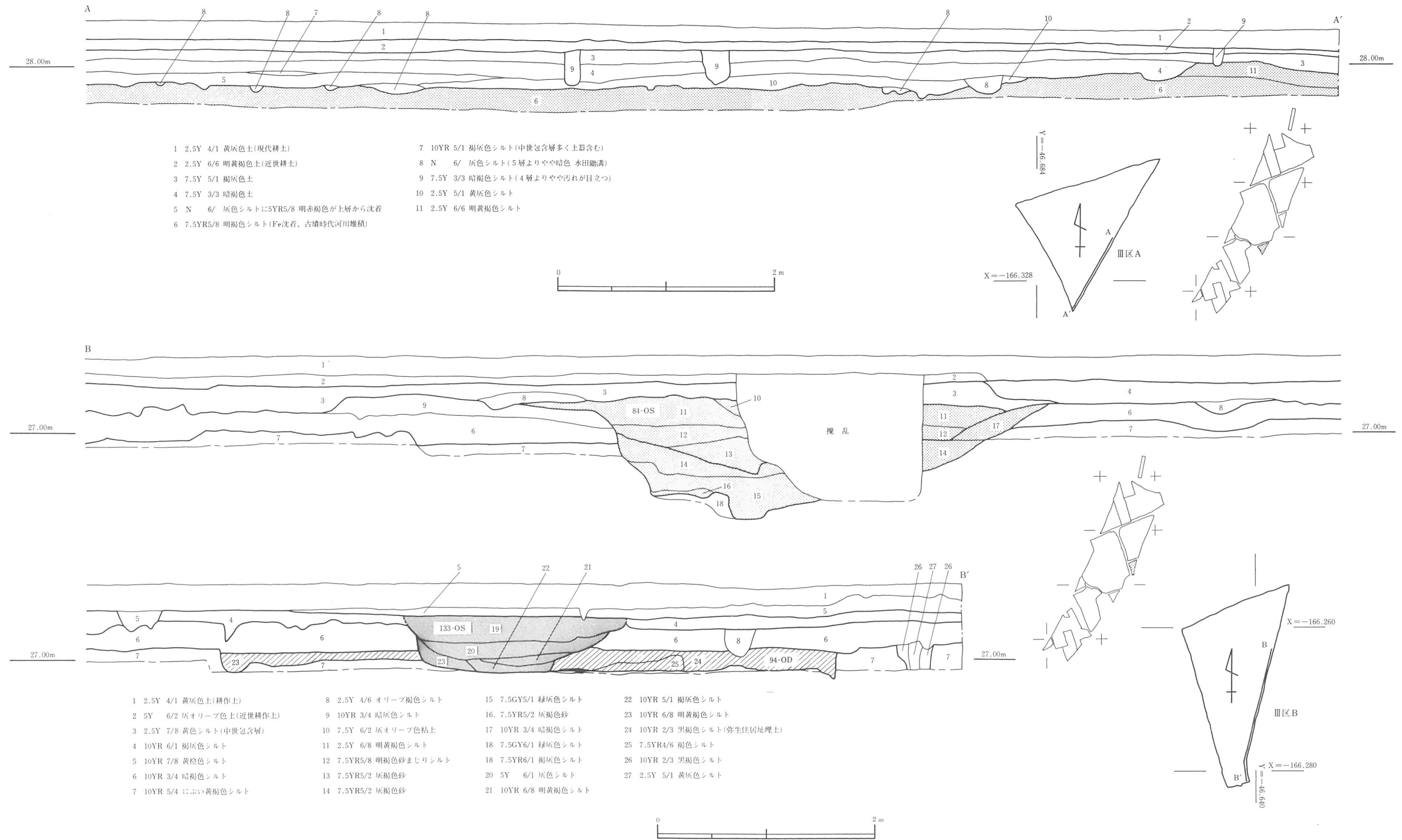
F～Gは沖積地と斜面の傾斜変換点の土層堆積を示すもので、2.5Y5/1黄灰色土層、7.5YR6/8橙色シルト層が近現代の耕作土と考えられる。褐色砂礫層～黄灰色砂層は平安末～鎌倉時代、10YR4/6褐色砂礫層は奈良時代の堆積土と考えられる。

III区（第15・20図、図版8参照）

沖積地にA・B2箇所に分かれた調査区である。

III区Aの現地表面の高さはT.P.+28.3mで、現在水田に利用されている。1層が現在の耕作土、2層が明黄褐色の近世包含層である。3・4・5層は中世の包含層で、3・4層は褐色系の土である。5層は灰色シルトである。5層と6層の間に不整合が見られるが、中世頃の耕作の影響によるものと考えている。6層は明褐色シルトで上部に鉄分沈着が著しい。この層は下にいくにつれて明青灰色になる。古墳時代の河川による堆積層であることが前回の調査で確認済みである。

III区BはIII区Aより50m北東に位置する。現地表面の高さはT.P.+27.7mで、III区Aより1段低く、現在水田耕作に利用されている。1層は現在の耕作土、2・5層が近世の包含層である。3・4層は中世の包含層で、奈良時代の明瞭な包含層は確認できなかった。6層は弥生時代の包含層である。11～18層は84-O Sの埋土で、この溝は古墳時代後期を通じて機能していた溝で、大きく3回に分かれて自然に埋没している。20～23層は前回の調査で確認した鎌倉時代の大溝の埋土である。24・25層は弥生時代後期の竪穴住居址（94-O D）の埋土である。7・19層は遺物の出土を確認できなかった層で、弥生時代以前に堆積した河川堆積の層である。



第15図 III区A・B土層断面図 (1/40)

IV区D（第16・20図、図版10上参照）

石津川の氾濫による沖積地に当たるため、各時代の地層が良好に遺存している。先述したように、この地区の調査は弥生時代まで行ったため、他の地区より下の地層を検討する機会が多かった。とはいえ、1987年度の調査では縄文時代まで掘り下げており、今回の報告分では沖積層のごく一部を知ることができたにすぎない。また調査の都合上、地層の区分と同定・記録などの方法が統一できていない。よって、大庭寺遺跡沖積層の基本層序を確立することは、将来の課題とせざるを得ず、ここではその基礎になる材料を提示するにとどまっている。なお、遺構の検出面の認定（上面・下面・基底面など）については趙哲^{註1}氏に従っている。

地層は現代の盛り土を除いて大きく7層に分類され、さらに細分可能な層もある。

第7層：灰黄色系の細砂混じり粘質シルトの水成層で、部分的に砂礫を含む。層厚は40cmを越え、調査地全面に広がっている。遺物は出土していない。

第6層：チョコレート色に近い砂混じり粘質シルトまたはシルト質粘土では、本調査区の鍵層である。酸化鉄が沈着している。層厚は10～20cm程度であるが、地形が高くなる調査区南西部には分布していない。弥生時代中期の溝群は、とりあえず本層の上面検出遺構と考えている。実際には本層を除去してプランを確認したものが多い断面観察でもこれらの溝と本層との区分は明瞭ではなく、課題を残している。本層の下面の落ち込み（13-OX）で弥生時代中期の土器が出土している。なお、1987年度調査B地区では、本層の上から布留式期や弥生時代後期の遺構が掘り込まれていた。また同A地区の土層断面では第9図の第7層に相当し、C地区では第15図の第10層に相当するようである。

第5層：調査区北半部に分布する黄褐色系の粘質シルトで、ごく一部に第6層や水成粘土（層準不明）の小ブロックが混じる。層厚は5～10cm程度である。遺物はごくわずかに須恵器の破片が出土したのみである。

第4層：主に調査区北半部に広がる水成層で、灰黄色系の粘土（第4b層）と暗灰黄色の小礫～砂（第4a層）に細分される。第4b層は層厚10～30cmで、調査地北半部の落ち込みや南半部の古墳時代の溝の中に堆積していた。層中に極細砂のラミナが認められる。第4a層も、層厚5～15cm程度のラミナが明瞭に認められる洪水層で、南半部の古墳時代の溝やその上などに部分的に残存していた。第4b層には古墳時代後期の須恵器が包含されている。第4a層は遺物を含んでいなかった。IV区B（橋脚部分）の第4層とは別の基準である。

第3層：調査区全面に広がる中世の層準である。第3 b層は層厚10～30cmの灰黄色粘質シルトで、酸化鉄・マンガンの沈着が著しい水田耕土である。少し砂を含んでおり、第4 a層等が耕起されたものと思われる。本層が含む最新の土器は鎌倉時代である。第3 a層は第3 b層の上面を覆う水成層（ラミナが認められる）で、灰白色極細砂である。本層は第3 b層のくぼみの上などごく一部に厚さ10cm程度しか残っておらず、遺物はない。第3層は1987年度調査C地区の第15図、第5層・第22層に年代のうえで、相当（層相は異なる）し、本遺跡北部の沖積地に広く分布しているようである。

第2層：近世の水田耕土で、にぶい黄色～灰オリーブ色の細砂～含砂礫シルト質砂から成る。調査地の大部分では厚さ数ミリ以下の白色極細砂の水成層を部分的に挟んで上下2層（第2 d層・第2 e層）に分かれる（第17図）が、北部（第16図）では5層に細分される。層厚30～50cmである。砂を多く含むのは第3 a層やそれより上の洪水層を耕起したためであろう。本層出土の最新の土器は江戸時代の陶磁器類で、その下面にはいわゆる鋤溝と呼ばれる耕作痕が検出される。

第1層：現代耕土で、層厚は30～40cmである。

Ⅳ区B・橋脚部分（第17図、図版9参照）

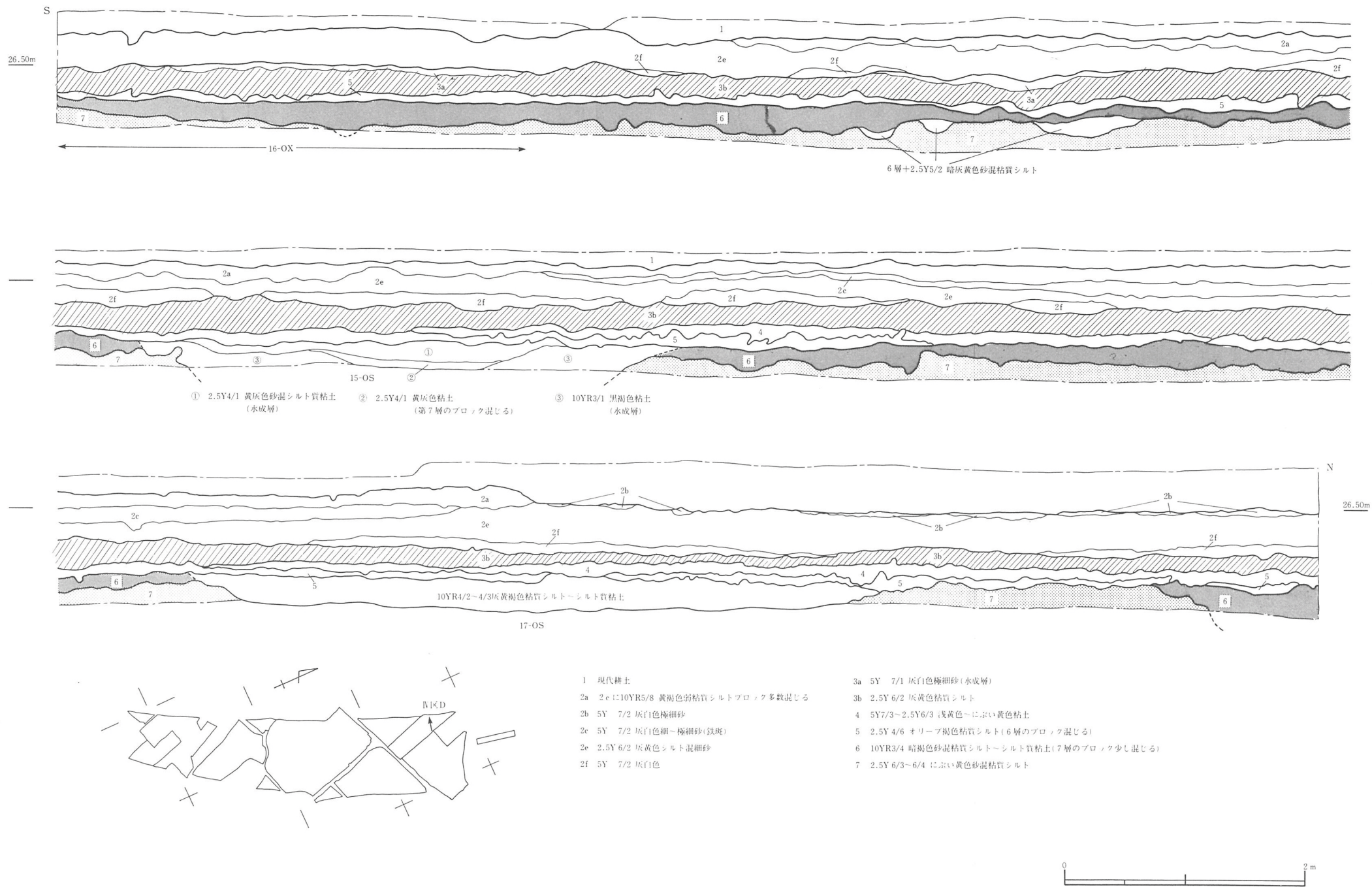
調査の都合上、壁面の連続断面図を作成できず、北壁の部分的な記録にとどまっているが、Ⅳ区Dに準じて層序の記述を行う。

7層：鍵層となる第6層の下の層準を便宜的に第7層としたが、3層に細分される。第7 c層は水成層で、灰白色系のシルト質粘土（第7 c層）とその上面を覆う水成の砂（第7 c層）からなる。後者は第17図ではごくわずかしかなかったが、反対の南壁には良好に遺存し両者の層理面には遺構らしきくぼみも認められた。前者は層厚55cm以上を測り、Ⅳ区Dの第7層にあたる。第7 b層は層厚10～15cmの灰オリーブ色砂混じり粘質シルトで、第7 a層は層厚15～20cmの灰黄色砂混じりシルト質粘土である。第7 b層と第7 a層は酸化鉄の沈着が著しく、水田耕土かもしれない。第7層は遺物を含んでいないので年代不明である。

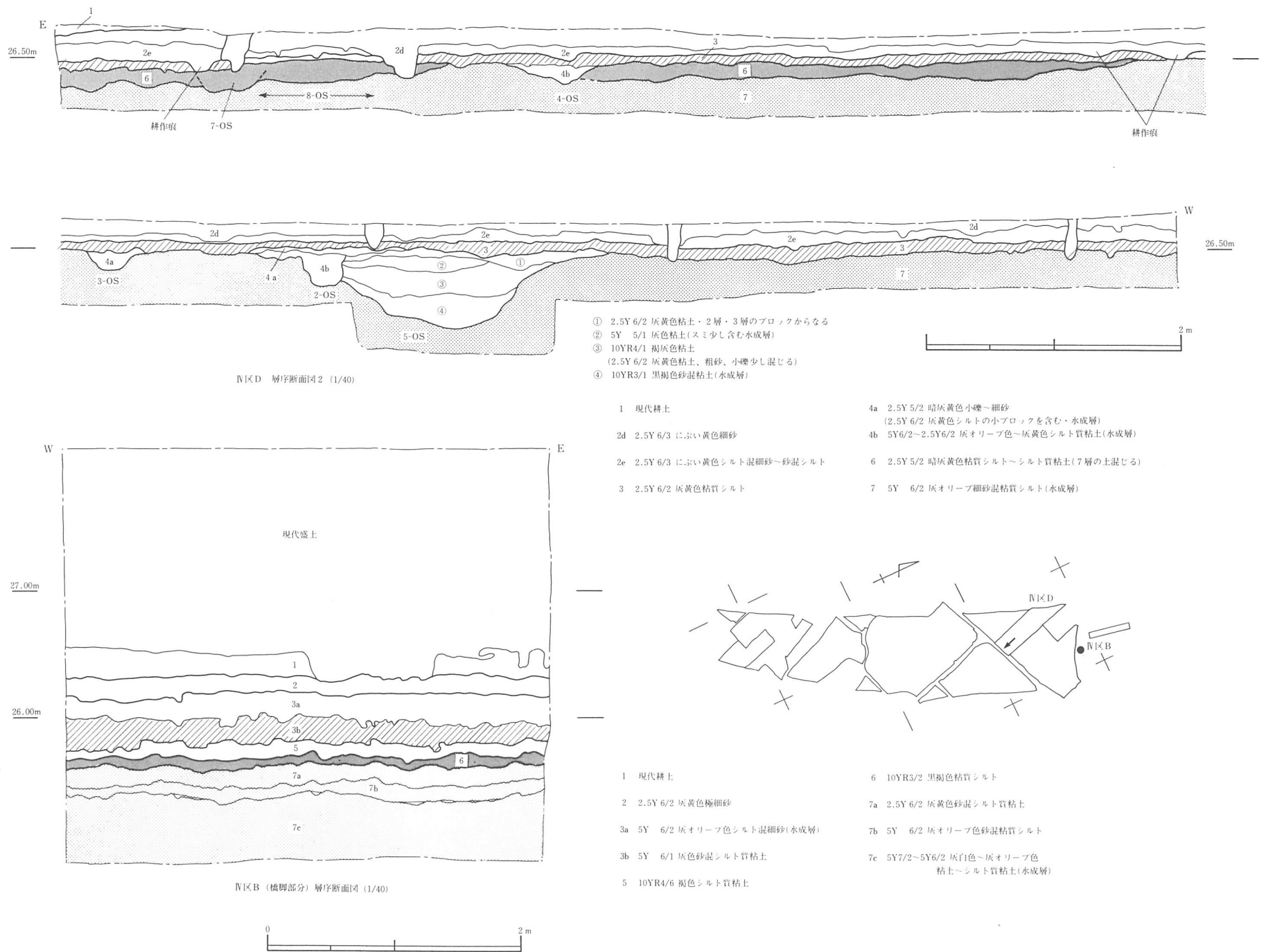
第6層：鍵層となる黒褐色粘質シルトで、層厚は10cm程度を測る。Ⅳ区Dの第6層である。酸化鉄の沈着が著しい。遺物はない。

第5層：層厚10～15cmの褐色シルト質粘土で、Ⅳ区Dの第5層に相当する。遺物はない。

第4層：第5層を切って検出された溝に堆積していた水成層で、灰色～黄褐色シルト～中砂である（第17図の記録位置からはずれている）。遺物はないが、Ⅳ区Bの前年度調査で



第16図 IV区D層序断面図 (1/40)



第17図 IV区B・D層序断面図 (1/40)

これにつながる溝が検出されており、奈良時代の土器を含んでいた。IV区Dの第4層（この調査区では認められず、失われたと思われる）とは異なる層準である。

第3層：第3b層は酸化鉄の沈着が著しい灰色の砂混じりシルト質粘土である。層厚15～20cmの水田耕土で、瓦器を含む。上面には耕作痕が検出される。IV区Dの第3b層である。第3a層は第3b層の上面を覆う水成層で、灰オリーブ色シルト混じり細砂である。小礫を含み、層厚は15～20cmである。IV区Dの第3a層に相当する。

第2層：近世の水田耕土で、層厚は15～20cmである。IV区Dの第2層であるが、ここでは細分されない。

第1層：現代耕土である。

IV区A・B・C（第18・20図、図版9参照）

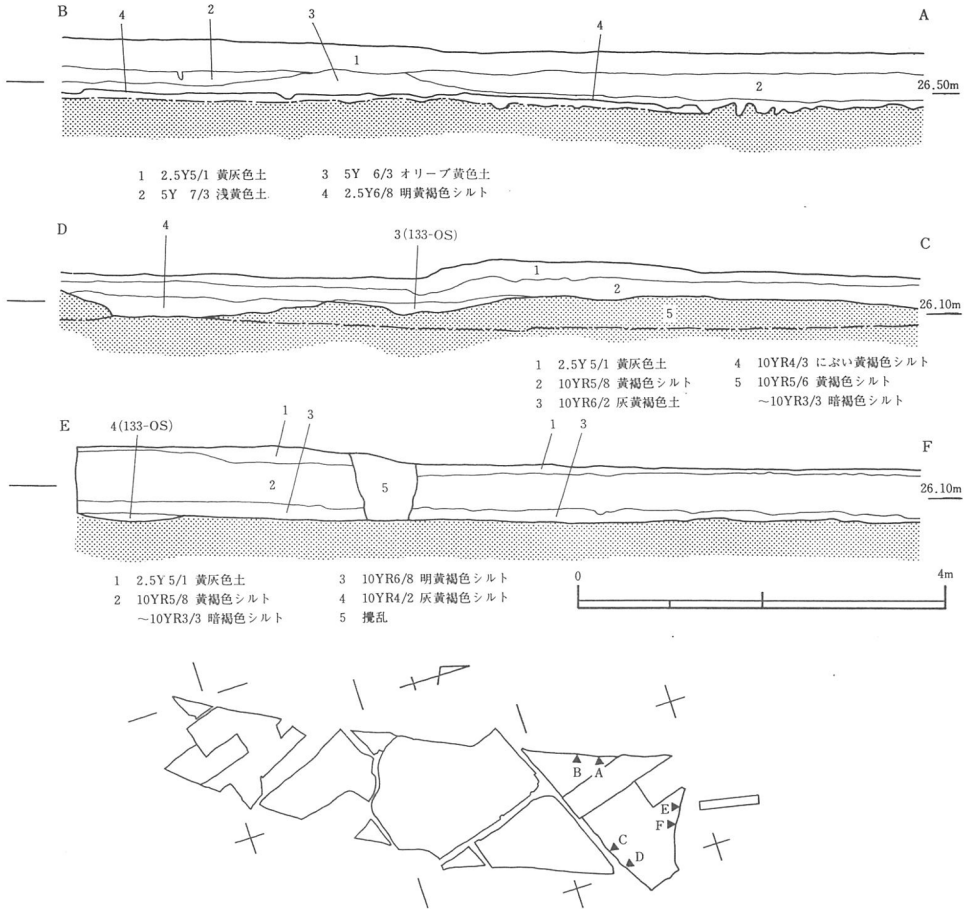
IV区は沖積地に立地するもので、1989年度の調査では133-O S内の遺構保存の観点からT.P.+26.00～26.40m前後までの調査で終了した。但し、この高さで10YR黄褐色シルト層を検出しながら調査を行ったところIV区Aで161-O O、IV区B・Cの東端で奈良時代の遺構が検出されるなど、平安末期～鎌倉時代の遺構面に部分的に古い時期の面が重なっていたと考えられる。しかし、IV区Dで検出された3b層をこの時期の層として認識していなかったこともあり確実に調査面がこの層で終わっていない部分も生じている。A～BはIV区Aの西側の断面を提示したものである。1・2層は近現代の水田耕作土および堆積層である。3層の部分で盛り上がっているのは水田の筆境と考えられる（詳細は第IV章第7節参照）。4層は平安末～鎌倉時代の堆積層と考えられる。5層はこの時期の地山と考えられる。

C～D・E～FはIV区Bの層序を示したものである。1・2層は近現代の水田耕作土および堆積土である。C～Dの3層・E～Fの4層は133-O Sの埋土、C～Dの4層・E～Fの5層はこの部分のみのもので攪乱土である。5層はこの時期の地山と考えられる。133-O Sは南から北に縦走して検出された。

V区（第19・20図、図版10下参照）

この地区は、現在の石津川から20mほど西側にあたる。現地表面の高さはT.P.+24.6～25.5mであり、道路を挟んだ南側の第IV区とは1.2～2.1mの比高差がある。調査以前はレストランが建っており、その基礎工事の影響が部分的に見られた。この建物が建つ前は水田として利用されていた。

提示した土層断面図は、南北40m、東西6mの調査地の西側（K04QT～K09AR）に

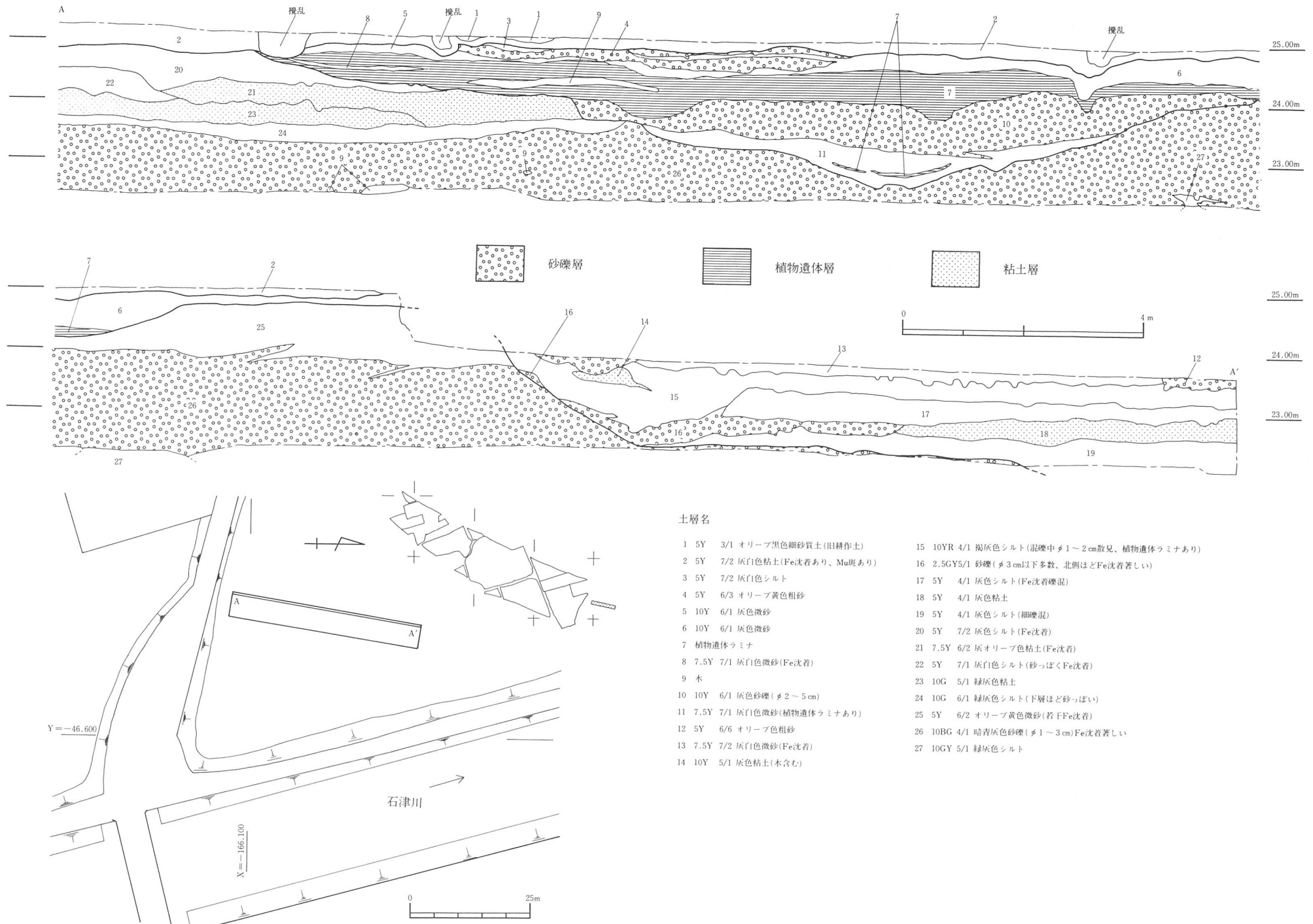


第18図 IV区A・B・C土層断面図 (1/40)

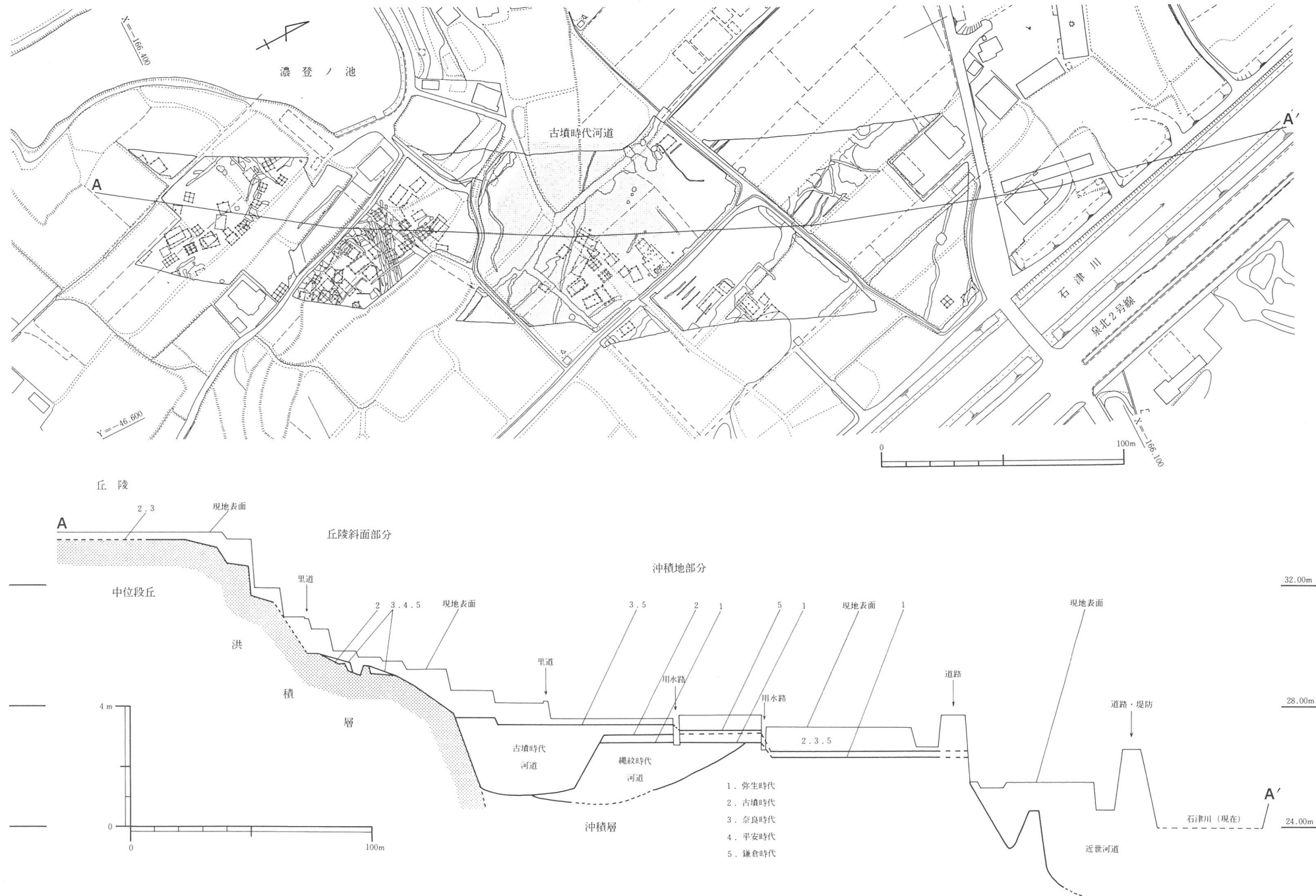
あたり、機械掘削により盛り土（厚さ約20cm）と、旧水田耕作土（約10cm）を除去した後のものである。土の堆積は、部分的に水田耕作の為の床土層が薄く認められるほかは全て石津川による水成堆積であった。堆積の時期は大きく2時期に分けられる。南側上層と北側は下層のシルトや粘土の層を切りながら堆積している。瓦などの出土遺物から近世頃の堆積と判断している。また縄文時代後期の深鉢片 F 3が出土したのもこの層からである。この層の中には厚い植物遺体の堆積が見られる。南側から中央部の下層は木材が出土したほかに遺物がなく、上層の近世と考えている層以前に堆積したとしたが判断できない。

注釈及び参考文献

註1 趙 哲済「遺構検出面の便宜的な呼称」『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』大阪市文化財協会 1983



第19図 V区土層断面図 (1/80)



第20図 調査地地形模式図 (平面1/2000・断面縦1/160・横1/2000)

第2節 弥生時代

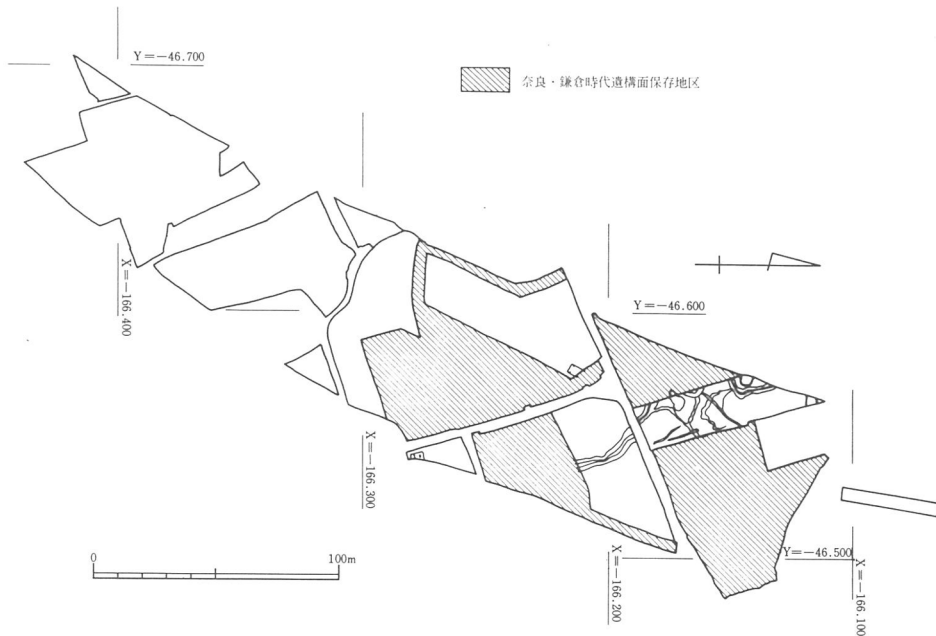
弥生時代の遺構はⅢ区とⅣ区Dで検出された。これは沖積地のなかで下層遺構の調査を実施した地区でもある。Ⅲ区では後期に位置付けられる竪穴住居址が1棟検出された。1987年度に調査した石津川旧河川の右岸に立地している。同時期の竪穴住居址は1987年度においても検出されており、これで2棟目である。更に今後、発見される可能性は高い。

Ⅳ区Dでは7～8条の溝を検出した。このうち調査区の南西隅で見つかった5-O Sはその方向性、出土遺物の時期から1987年度に調査し、簾状文によって装飾された壺を検出したA102-O Sにつながるとみられる。これらの溝の方向はおおむね南北方向であるが、厳密には一定しておらず、中にはL字形に屈曲する溝もある。

94-O D (第21～23図、図版11下・12・75A参照)

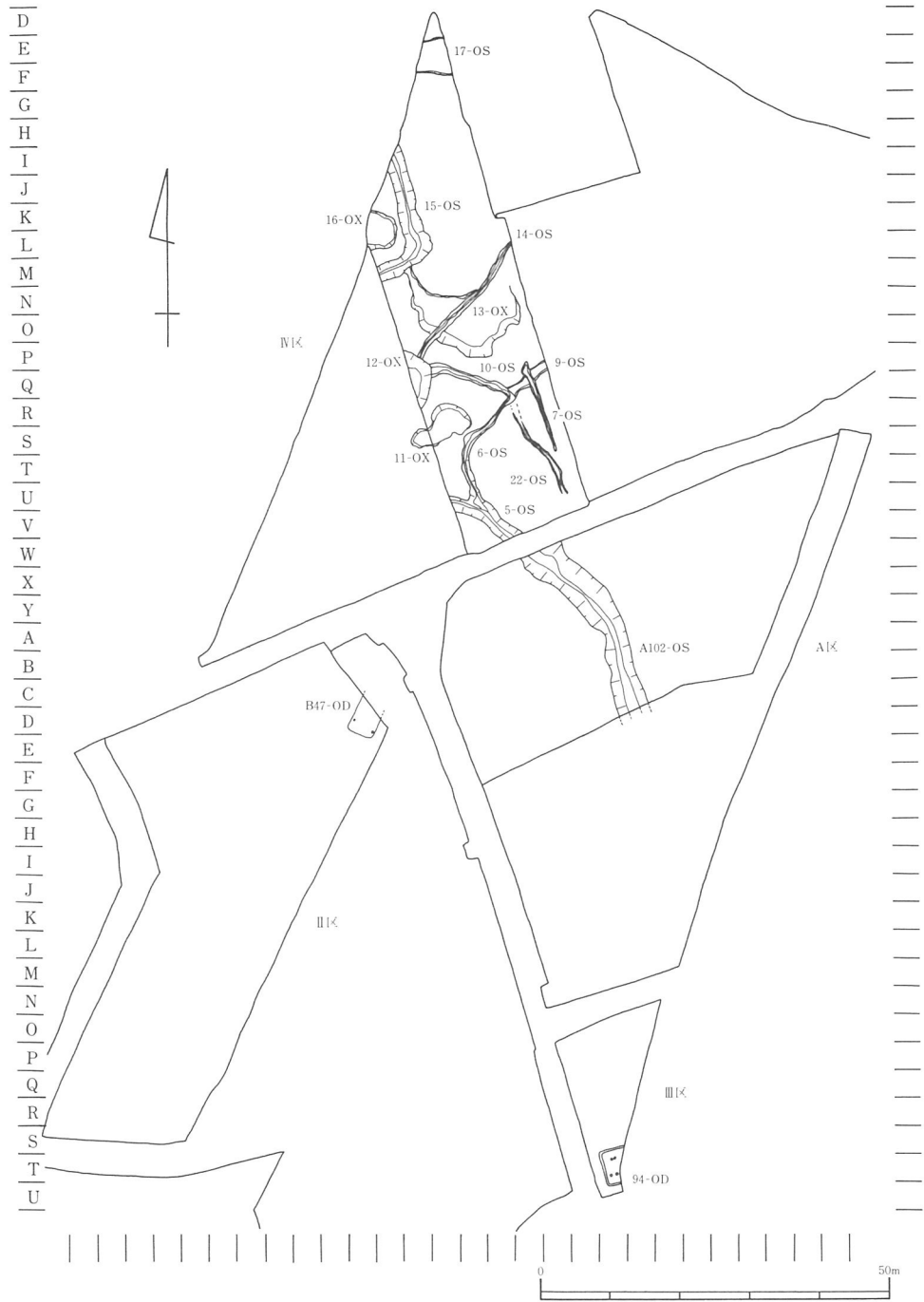
K14OT付近に位置する東西4m以上、南北5.25mの規模を持つ竪穴住居址で、おそらく方形のプランを持つと考えられる。建物の方位はN-15°-Wを向いている。1987年度に調査した旧河川の右岸に位置し、建物の検出レベルの高さはT.P.+27.10mを計る。

竪穴住居址は133-O Sによって中央部を切られている。壁は最大25cm残存し、壁の直



第21図 弥生時代全体図 (1/3000)

|U|V|W|X|Y|A|B|C|D|E|F|G|H|I|J|K|L|M|N|O|P|Q|R|S|T|U|V|W|

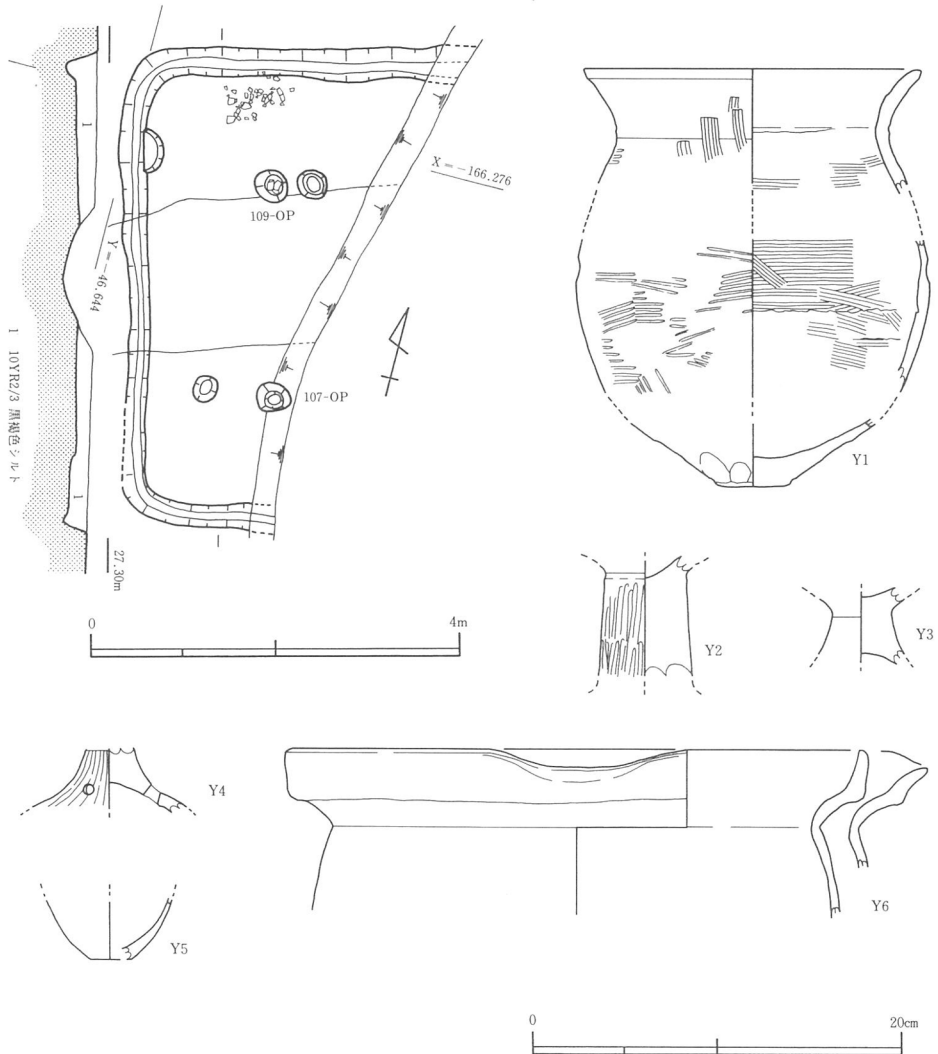


第22図 弥生時代遺構位置図 (1/1000)

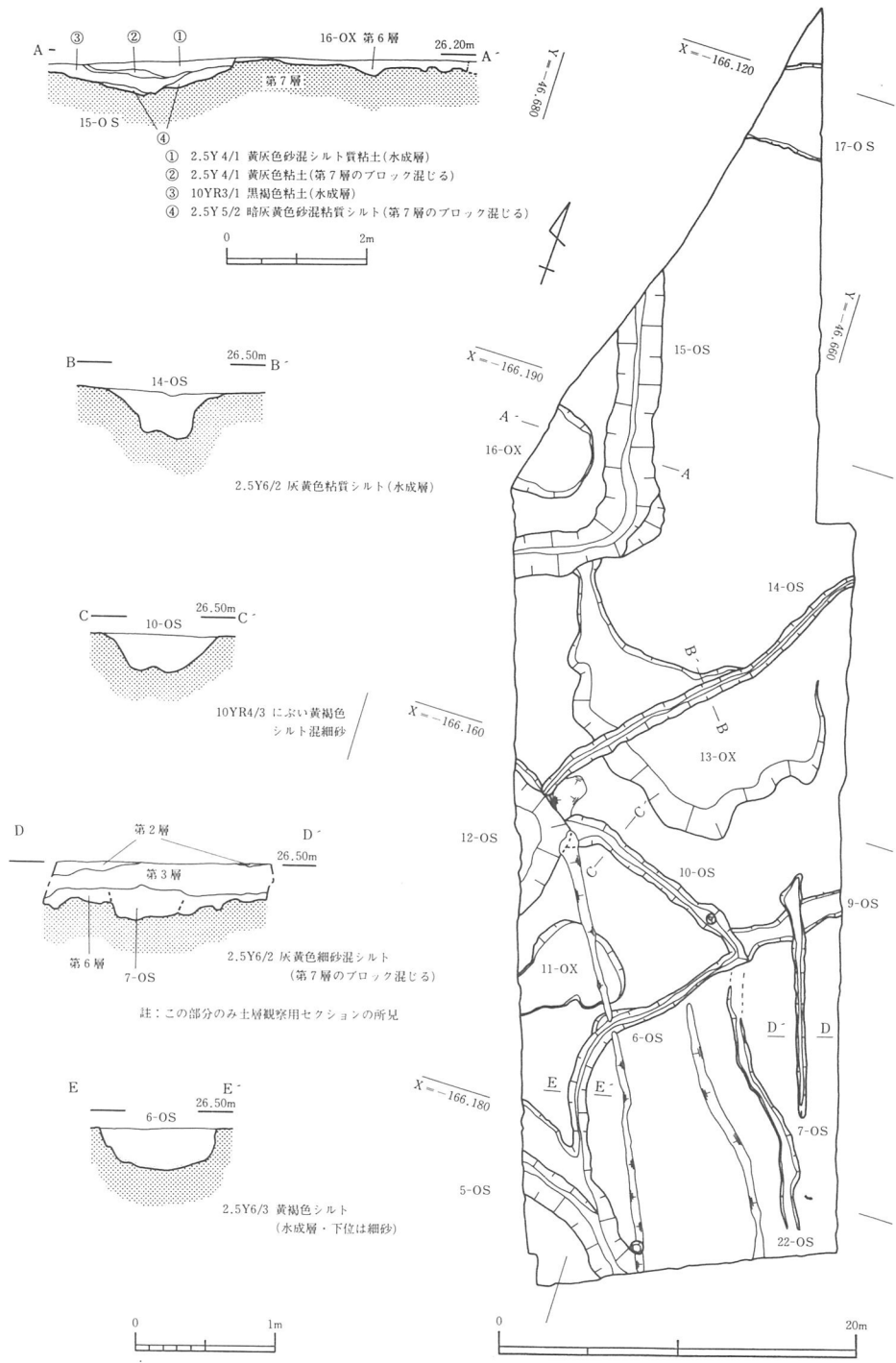
下には幅20cm、深さ10cm程の壁溝が巡っている。住居址の埋土は10Y R2/3黒褐色シルトである。調査範囲内では炉を検出することはできなかった。

柱穴は北西、南西隅近くで2基検出した。位置から見て107-OPと109-OPがそれである。北西の柱穴の規模は径35cm、深さ17cmを計り、柱穴内からは弥生土器が出土している。南西の柱穴の規模は径30~35cm、深さ25cmを計る。柱穴の埋土は住居址と同様10Y R2/3黒褐色シルトである。柱間隔は2.35mを計る。

床面は堅穴住居址特有の硬く締まった床ではない。床のレベルは北が南に比べ約5cm程



第23図 94-OD平面・断面図 (1/80)、出土遺物 (1/4)



第24図 IV区D第5層弥生時代遺構平面(1/400)・断面(1/100、1/50)図

高くなっている。

遺物は弥生土器が北壁直下と柱穴から出土している。器種は甕Y 1 高杯Y 2～4 鉢Y 5・6がある。甕Y 1は口縁径18.5cm、器高約22.5cmを計る。体部に粗いタタキを持ち、底部は平底をなす。高杯Y 2～4は脚部が棒状を呈するものとそうでないものがある。鉢Y 5・6は大型と小型の2タイプあり前者の口縁部は32cmの径を持ち、片口状を呈している。

竪穴住居址のプランが円形、隅丸方形ではなく方形とみられるが、出土した甕の形状からみて弥生時代後期前半に位置付けることができよう。

17-O S (第22・24図参照)

IV区Dの北端、K09F Iで一部を検出した。後述する5-O Sなどと埋土の様相がかなり異なるため、大きな落ち込みの可能性もある。幅約5.7m、深さ約0.25mで、底面のレベルは東と西でほとんど変化はない。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質粘土であった。弥生土器の小破片が数点出土している。

15-O S (第22・24～26図、図版14下・75C・76参照)

K09MGからK09I Gにかけて東西方向から南北方向にL字状に曲がる溝で、検出長は約20m、幅約2.0～3.0mである。底面のレベルは北で約0.3m低く、断面形はV字形である。埋土は4層に区分され、そのうち①層と③層は水成層粘土ので、滞水期が2度あったことが判る。底面のレベルは北が約0.25m低く、流水時には北へ流れたと判断される。

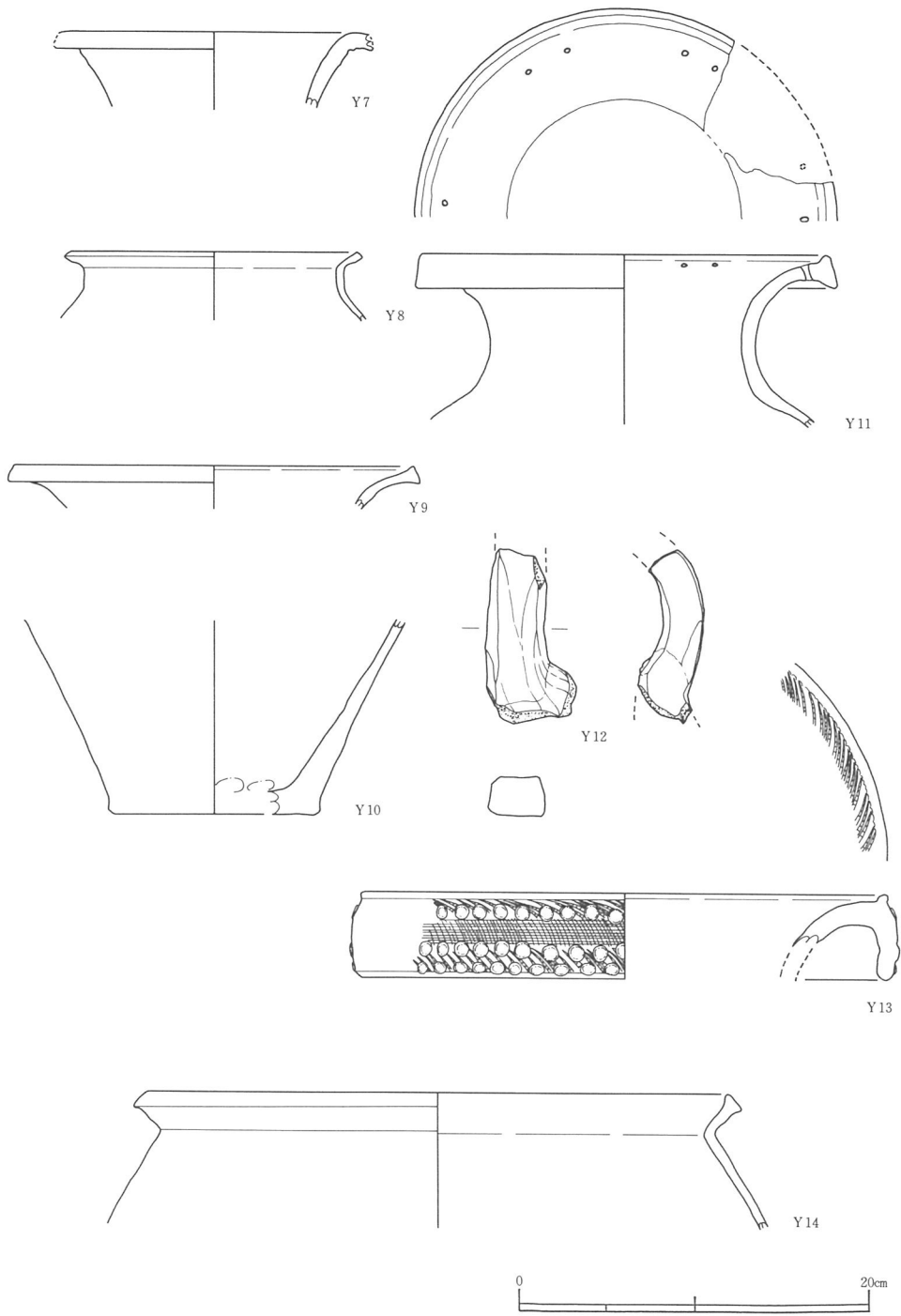
遺物は弥生土器と石器である。Y 7は広口壺で、頸部の残存部分は無文である。Y 16は出土地点と層位の記録からこの遺構と判断した。片刃の石包丁で、結晶片岩製である。Y 17は大型のサヌカイト製刃器で、A面に大きく自然面を残している。A面の右縁に片直刃、B面の右下縁にやや凸湾する片刃をつくりだしている。

14-O S (第22・24・25図、図版15上参照)

K09P IからK09L Lに至る溝で、方向は南西～北東である。13-O Xの下でプランを確認した。検出長は約21m、幅約0.6～1.1mで、深さは0.3～0.5mである。底面のレベルは北の方が南より0.25m程低く、流水時の方向は北東であったと考えられる。断面形はU字形に近い。埋土はおそらく水成の粘質シルトである。遺物には、頸部が上に立ち上がったから外反する甕Y 8がある。

12-O S (第22・24図、図版14上・75C参照)

溝の両肩のうち、片側を検出したのみである。2-O Sに切られている。埋土の様相・規模などが15-O S・5-O Sと同様であることから、溝と考えられる。深さは約0.9m



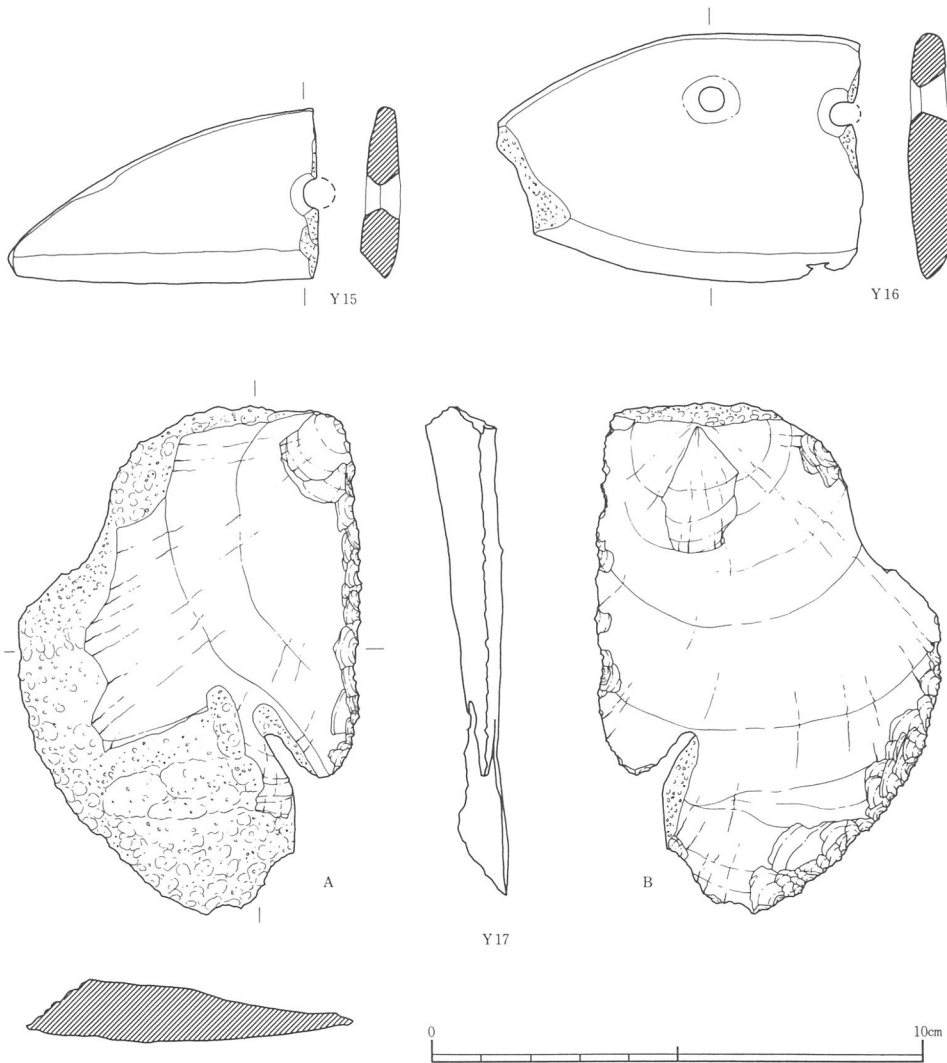
第25图 IV区D第5层遺構他出土弥生土器 (1/4)

である。

遺物には、口縁端部を垂下させ、列点文と簾状文のうえに円形浮文を張りつけた壺Y13などがあり、下層（15-O Sの③層・5-O Sの④層）から出土した。

10-O S（第22・24図、図版15上参照）

K09P IからK09Q Kにかけて検出した東西方向の溝で、検出長は約12mである。2-O Sに切られている。幅約0.7~1.5m、深さ約0.25mで、断面形はU字形である。埋土は



第26図 弥生時代石器 (2/3)

図示したとおりであるが、水成か否かの判断は困難である。顕著な遺物はない。

9-O S (第22・24図参照)

10-O Sと6-O SがつながるK09Q KからK09P Mにかけて検出した溝で、方向は南西～北東である。7-O Sに切られている。検出長は約6.5m、幅約1.0～1.5m、深さは約0.1m程度である。断面形は浅い皿状を呈し、底面のレベルは殆ど変わらず、北東部が2～3cmほど深いにすぎない。埋土は10-O Sと同様である。遺物はない。

7-O S (第22・24図参照)

K09S MからK09P Lにかけて検出した南北方向の溝で、9-O Sを切っている。検出長は約14m、幅0.45～1.20m、深さ0.10～0.15mで、断面形はU字形に近い。底面のレベルは北で約0.2m低い。埋土はおそらく水成のシルトである。遺物はない。

22-O S (第22・24図参照)

K09U MからK09R Lにかけて検出した溝で、方向は南東～北西である。検出長は約14.5m、幅0.5～1.0mで、深さは0.05m程度である。底面のレベルは北で約0.1m低く、断面形はU字形である。埋土は10-O Sと同様であった。削平のため大半が失われているが、本来は北へ続き、10-O S・6-O Sなどにつながっていたと考えられる。断面形はU字形である。遺物はない。

6-O S (第22・24図、図版75C参照)

K09U JからK09Q Kにかけて検出した溝で、5-O Sから枝分かかれし、弓なりに北東へカーブして、10-O Sや9-O Sとつながっている。検出長は約18m、幅0.5～1.2mで、深さは0.2～0.5mである。底面のレベルは北で約0.1m高く、断面形はU字形である。埋土は水成の粘質シルトで、底面付近には細砂のラミナが認められた。

遺物は弥生土器の広口壺Y 9とサヌカイトの小剥片がある。

5-O S (第17・22・24図、図版15下参照)

K09V LからK09U Iにかけて約10m分のみ検出した溝で、南東～北西の方向をとる。幅約2.0～3.6mで、深さは約0.6mである。底面のレベルは西が約0.1m低く、断面形はU字形に近い。埋土(第17図)は4層に分かれ、①層は人為的に埋積された可能性もある。②層と④層は水成層である。②層以下は15-O S・12-O Sと同様の堆積状態であった。

遺物は①または②層に布留式の甕細片(図化不可能)が含まれており、この溝が最終的に埋まった年代を示すと思われる。

16-O X (第22・24図参照)

K09KG付近に位置する。調査地外に広がる遺構で、第6層下面で検出した。平面形は円形ないし楕円形を呈するようで、南北約5.4m、東西約3.8mを検出したにとどまる。深さは0.10~0.15mで、断面形は浅い皿状を呈し、若干の凹凸もある。埋土は第6層で、このくぼみはさらに東へごく浅く広がって15-O Sに切られている。遺物はない。

13-O X (第22・24図、図版75C参照)

K09MHからK09NKにかけて第6層下面で検出した落ち込みである。平面形は不整形であるが、北西部では溝状になっている。深さは0.15~2.0mで、埋土は第6層である。

遺物には弥生時代中期の土器の把手Y12がある。

11-O X (第22・24図、図版75B・C・85C参照)

K09RIに位置する落ち込みである。不整形な平面形を呈し、南北約6m、東西約6mの範囲で検出し、調査地外に広がっていた。深さは0.15~0.30mで、2-O Sに切られている。埋土は水成の黒色粘土で、一部に焼土、炭などを含んでいた。

出土遺物は弥生土器の広口壺Y11・底部Y10などである。前者は口縁部に二孔一對の透かしを六方に穿っており、蓋付の土器である。

その他の遺物

Y14(第25図)は第6層除去中にⅣ区DのK09OLで出土した弥生時代中期の甕である。13-O Xに伴う可能性がある。

以下(27~29図)は各地区の包含層から出土した石器である。

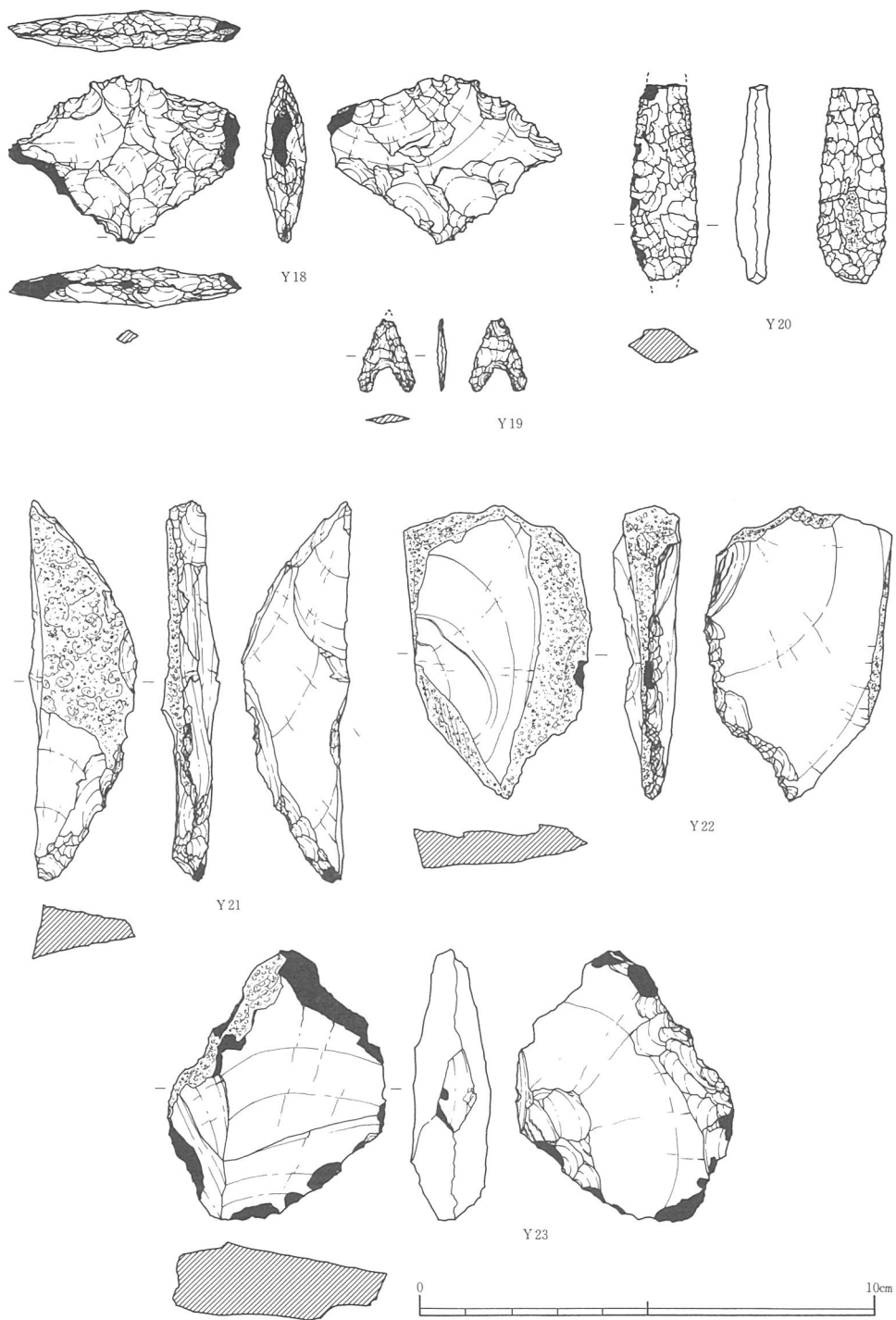
Y18はサヌカイト製の石錘の一部と考えられるものである。先端にあたる部分は欠損している。長さ5.12cm、幅3.75cm、厚さ0.98cm、重量13.3gである。一部に原礫面が残る。

Y19はサヌカイト製の石鏃である。長さ1.58cm、幅1.25cm、厚さ0.23cm、重量0.4gである。先端部は欠損している。

Y20はサヌカイト製の尖頭器である。先端、頸部共に欠損している。片面中央部に自然面が残る。長さ4.21cm、幅1.51cm、厚さ0.73cm、重量5.2gである。

Y21はサヌカイト製のスクレイパーの未製品の可能性がある。腹面は主要剝離面を残さない。平な剝片を素材とし、その側縁を加撃して得られた弧状の剝片辺縁の一部に両面から調整を施す。腹面には原礫面を残す。長さ8.41cm、幅2.40cm、厚さ1.26cm、重量24.4gである。

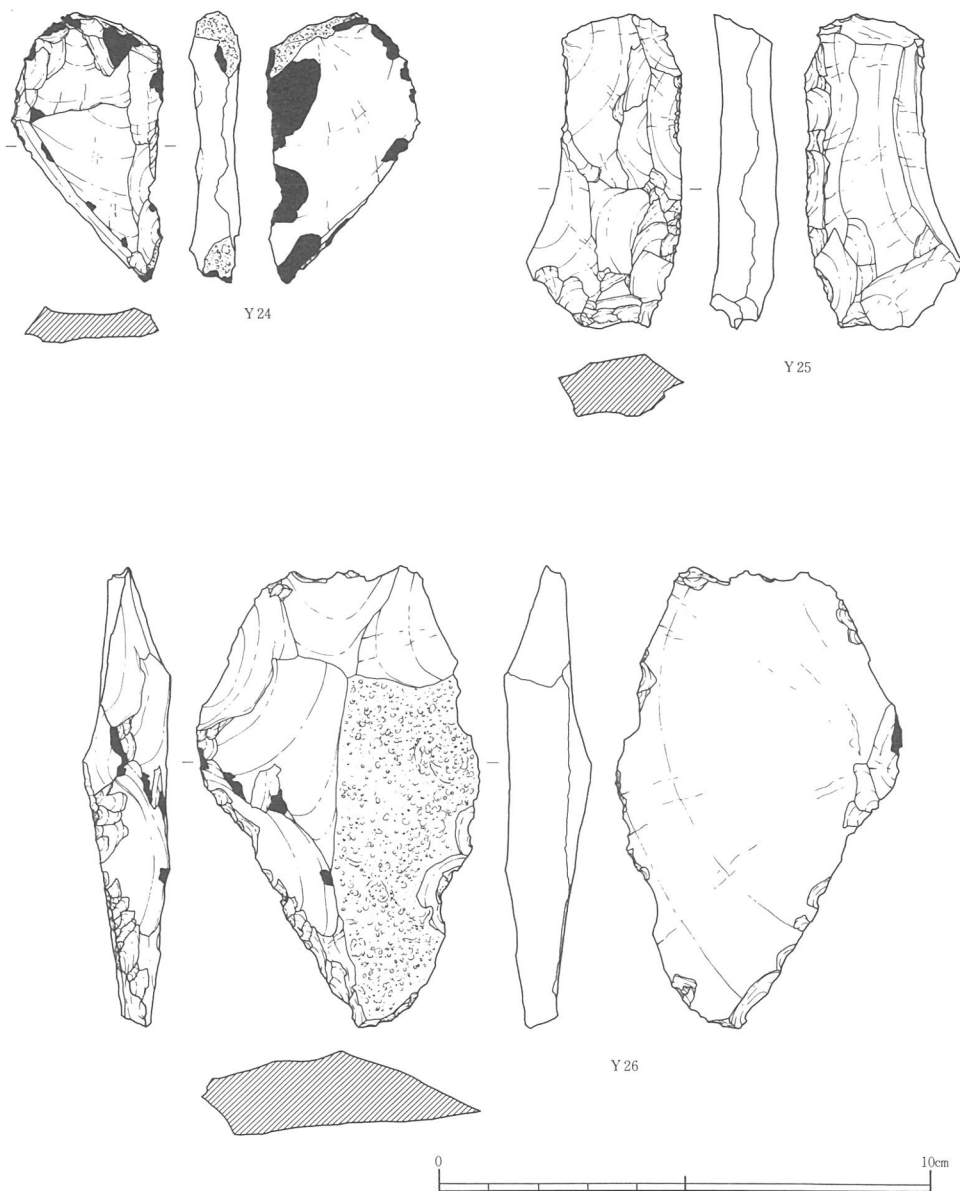
Y22はサヌカイト製のスクレイパーである。長さ6.45cm、幅4.07cm、厚さ1.48cm、重量33.6gである。



第27图 包含層出土石器 1 (2/3)

Y23はサヌカイト製のスクレイパーである。長さ5.92cm、幅4.87cm、厚さ1.72cm、重量43.9gである。一部に原礫面を残す。

Y24はサヌカイト製のスクレイパーである。長さ5.53cm、幅3.13cm、厚さ1.02cm、重量17.7gである。部分的に原礫面が残る。



第28図 包含層出土石器 2 (2/3)

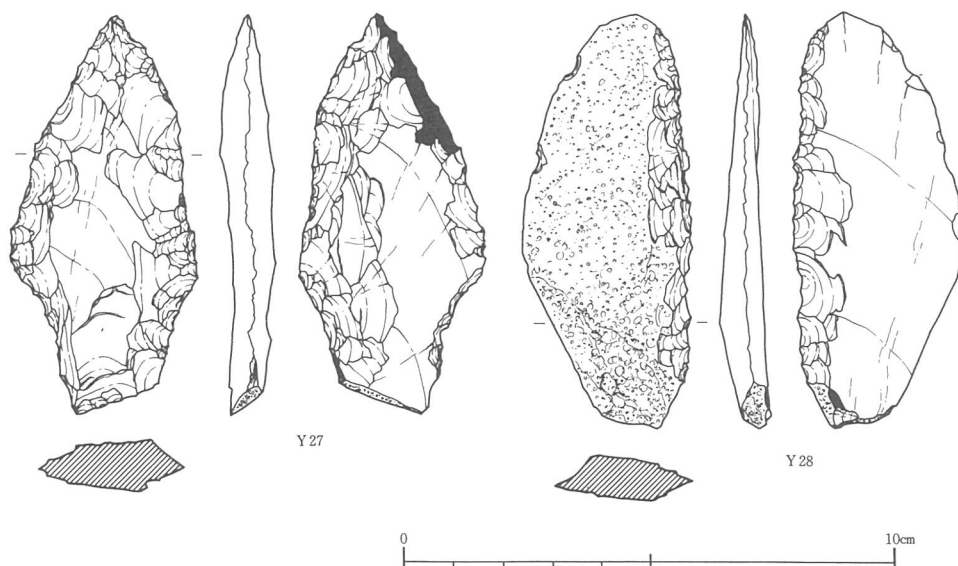
Y25はサヌカイト製のスクレイパーである。長さ6.52cm、幅3.24cm、厚さ1.43cm、重量27.5gである。刃部に、使用痕跡の可能性ある潰れが観察できる。

Y26はサヌカイト製のスクレイパーである。長さ9.45cm、幅5.87cm、厚さ1.75cm、重量75.9gである。

Y27はサヌカイト製のスクレイパーである。斜軸の不定形剥片を素材とし両面から調整剥離を行っている。長さ8.09cm、幅3.79cm、厚さ1.06cm、重量27.4gである。

Y28はサヌカイト製のスクレイパーである。縦長剥片を利用している。腹面は主要剥離面、背面は原礫面をそのまま残す。刃部形成の為の調整剥片の一側縁に両面から施されている。原礫面の状態から亜角礫を用いていると考えられる。長さ8.38cm、幅3.46cm、厚さ1.03cm、重量24.6gである。

以上の石器はI区の丘陵上からY19・Y20・Y28が、II区の丘陵斜面部からY18・Y21・Y22・Y23・Y24・Y25・Y26が、IV区の沖積地からY27が出土している。図化した以外にも剥片類は38点出土している。出土点数の内訳は、I区0点、II区27点、III区A2点、III区B0点、IV区A2点、IV区B4点、IV区C0点、IV区D2点、V区1点である。出土分布状況は図示した点数に反映されている。サヌカイト製石器および剥片がII区に集中するのは、丘陵上は削平が著しく、斜面部に土がかき落とされているため、遺物がII区に集中することになったと考えられる。沖積地部分では、明瞭な集中箇所は見られない。



第29図 包含層出土石器 3 (2/3)

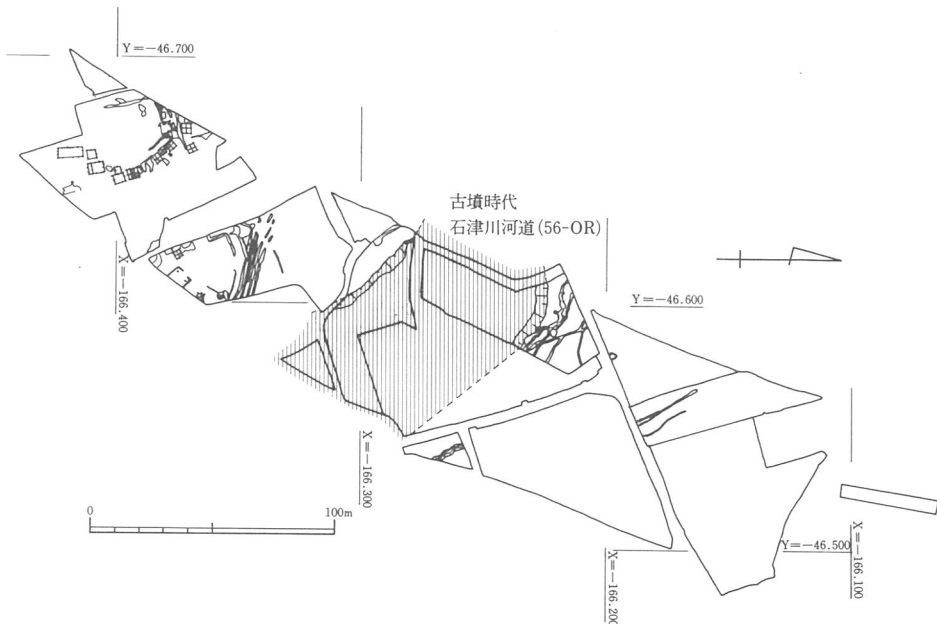
第3節 古墳時代

古墳時代の概略（第30図参照）

大庭寺遺跡の古墳時代は、中期後半頃から遺構・遺物などの生活の痕跡が明確になる。今回の調査区は、地形から丘陵上、丘陵斜面、石津川沖積地の3地区に分けることが可能であるが、各地区それぞれに遺構の分布に特徴が見られる。

丘陵上は、掘立柱建物が12棟以上と多いのが特徴で、他に溝5本以上、初期須恵器が出土した土坑などがある。丘陵斜面は、竪穴住居址2棟、掘立柱建物3棟以上、斜面を斜めに下がる溝群、須恵器の甕を数個体並べて埋め込んだ溝、韓式系の甕や甑を出土した溝、須恵器の甕と壺を使った土壇墓等がある。沖積地では、1987年度の調査で、石津川がこの丘陵の裾近くを時として川幅を60mから数mに変えながら流れていたことが確認された。また、1988、89年度の調査で当時の川の東岸において、数条の溝と土坑、布留期の井戸が検出されたことなどから、川の影響を受ける地域でも古墳時代の人々が生活していたことが判った。

この節では報告の便宜上から、いわゆる初期須恵器（本報告書ではI型式1～2段階までに相当）の頃をI期とし、その後の古墳時代をII期と分けて報告する。



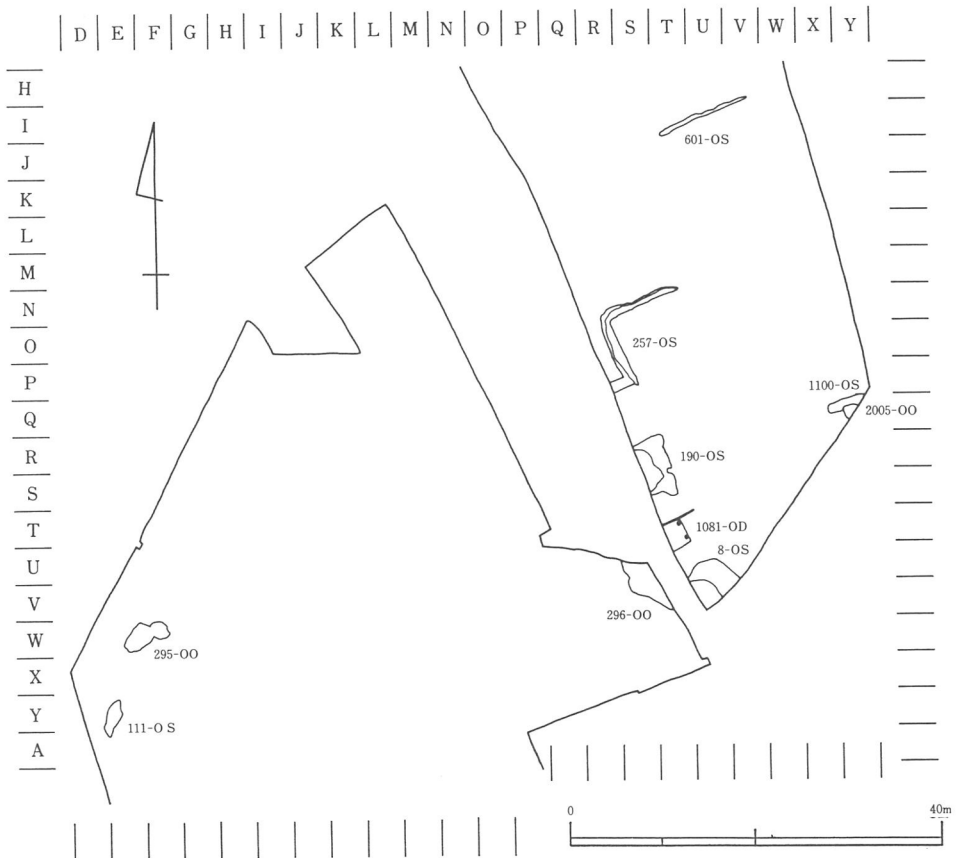
第30図 古墳時代全体図 (1/3000)

1. 古墳時代 I 期（第31図参照）

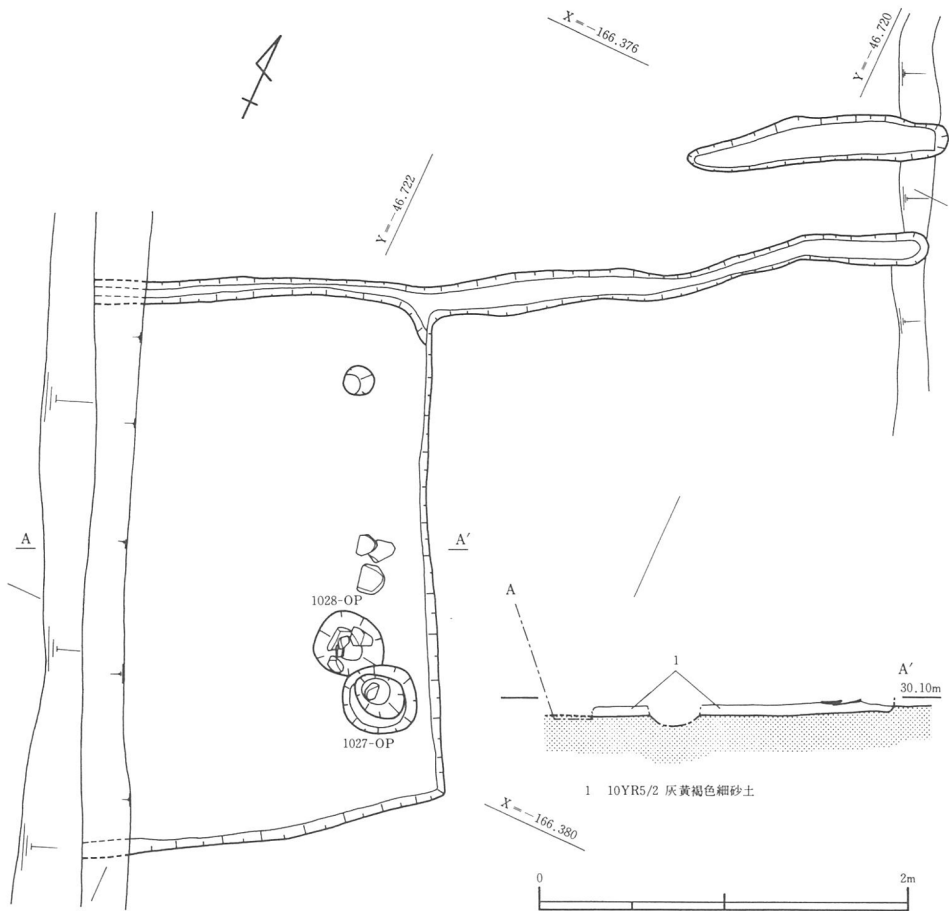
第 I 期の遺構、遺物は丘陵上と丘陵斜面部に集中している。

丘陵上は、後世の削平の影響が大きいと考えられ、この時期の遺構としては不定形な形の295-〇〇、111-〇Sに限られる。共に遺構の底付近から初期須恵器が出土している。

丘陵斜面部では、調査地の南側に遺構が集中している。296-〇〇は、斜面に堆積した包含層の一部である可能性があるが、韓式系の甕を始め多くの初期須恵器を出土している。1081-〇Dはこの時期の建物として唯一確認した竪穴住居址である。この時期は溝状の遺構が多く、その方向にも規則性が考えられ、また遺物も多く出土している。601-〇Sは、初期須恵器の甕が並んで出土している。1100-〇S、2005-〇〇は共に韓式系の甕や、甕などが出土している。2005-〇〇は竪穴住居址の可能性もある。



第31図 古墳時代第 I 期 I・II区遺構配置図 (1/800)

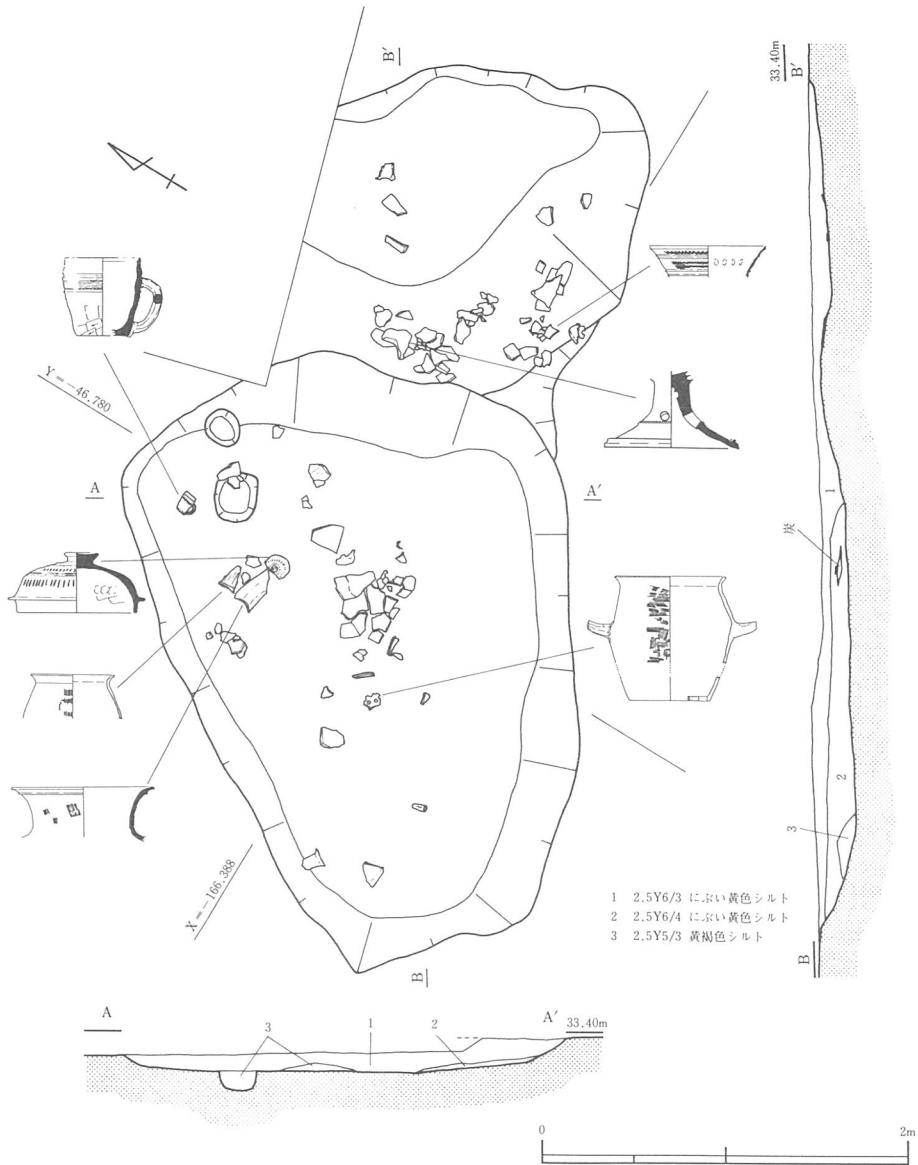


第32図 1081-OD平面・断面図 (1/40)

1081-OD (第31・32図、図版16参照)

K18TTに位置する東西1.65m以上、東西3.1mの規模を持つ竪穴住居址である。建物方位は $N-60^{\circ}-E$ である。丘陵の緩斜面に位置するため建物の検出レベルは西が高くT.P.+31.10m、東が低くT.P.+30.04mを計る。

竪穴住居址は後世の削平により壁が僅かに存在するだけである。壁溝は北辺のみ存在し、更に住居外へと延びる。溝の幅は最大20cm、深さは5cmを計る。おそらく屋外への排水のためのものとみられる。僅かに残存する住居内の埋土は10YR5/2灰黄褐色細砂土である。柱穴は2本検出したが北の柱穴が径15cmに対し南の柱穴の径は36cmと不揃いである。柱間隔は1.75mを計る。床面は西が東に比べて約7cm高く硬く踏み固められた痕跡はなく、調査範囲の制限によるものか竈跡は検出できなかった。

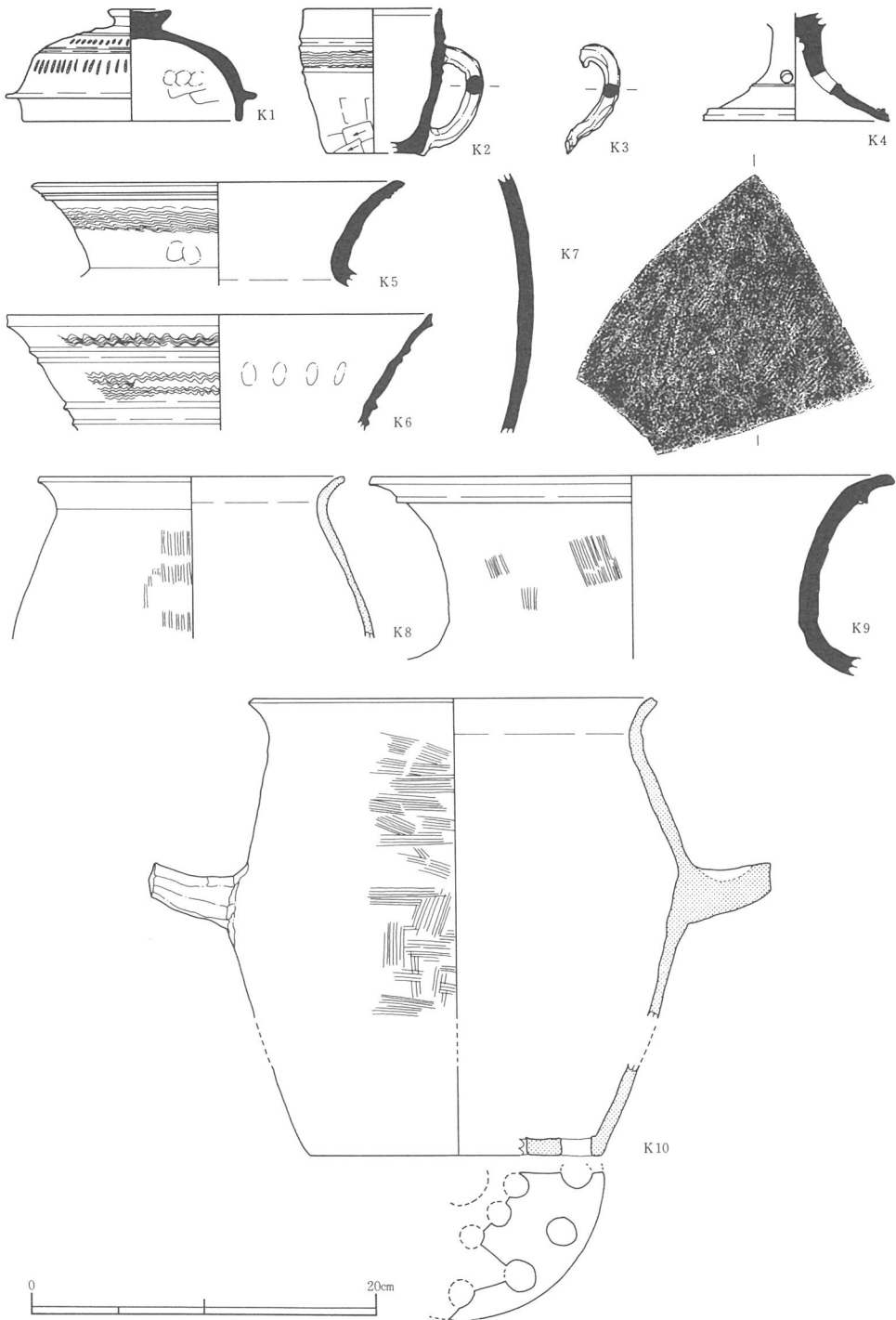


第33図 295-〇〇平面・断面図 (1/40)

遺物は図化できるものではなく、須恵器の甕の破片が柱穴から、韓系土器の平底鉢の破片が床面から出土した。須恵器からみてI型式2段階までの時期と考えられる。

295-〇〇 (第31・33・34図、図版17・18・77参照)

K18WFに位置する。平面は不定形で長径は4.72m、短径は2.4m、断面はU字形で深さは21cmである。検出時のプランは長方形に近く単一の土坑と見られたが、実際は2基の



第34図 295-〇〇出土遺物 (1/4)

土坑が重複していた可能性もある。土坑は検出状況から見て、かなり削平をうけているようであらうじて底の部分だけが残ったと見られる。埋土は1層が2.5Y6/3にぶい黄色シルト、2層が2.5Y6/4にぶい黄色シルト、3層が2.5Y5/3黄褐色シルトである。土坑内には須恵器を中心とする一群が検出された。状況から、廃棄された一群と見られる。

出土遺物は総破片数が357点出土している。須恵器は30点で蓋、把手付碗、高杯、甕の4器種があり、韓式系土器は327点で甕、平底鉢、甌の3器種が出土している。

蓋K1は丸い天井部を持ち、カキメと刺突文が2段に施文されている。稜は水平に長く、口縁端部は丸い。器壁は全体に厚くシャープさに欠ける。つまみ～天井部にかけてやや軟質であるが、内面は逆によく焼けており、更に灰の付着も顕著である。焼成時に天地逆の状態で焼いたことを示している。把手付碗K2は直線的に立ち上がる体部に大きな把手を持つ古いタイプである。体部上半には1単位6条の緩やかな波状文が施文されている。体部下半は横方向のケズリで調整されている。焼成は断面セピア色で硬質である。K3も碗の把手と見られる。高杯脚部K4は3方の円形のスカシを穿つ。孔の直下には凸帯を持ち、裾部にも断面三角形の凸帯を持つ。色調は明青灰色で、焼成は硬質、胎土も緻密である。器面には自然釉がかかっている。

甕には口縁部を波状文で施文したK5・K6とそうでないものK9がある。両者とも中型の範疇に入る甕である。K5は口縁端部に断面三角形の凸帯を持ち、1単位12本の太い波状文が施文されている。色調は暗青灰色で、焼成は硬質、胎土は緻密である。K6は口縁端部に断面三角形の凸帯を持ち、更にその下方に4本の凸帯と3段の波状文を持つ。K5に比べて器壁は薄くシャープである。色調は明青灰色で、焼成は硬質、胎土は緻密である。K9は無施文で口縁部に平行タタキの調整痕が僅かに残る。色調は明青灰色で、焼成はK5・6とは異なり軟質である。K7は体部の破片である。外面は丁寧なスリケシを行い、内面はハケメによって調整している。

甕K8は形態から見て長胴タイプと見られる。外面には平行タタキが僅かに残る。色調は褐色灰色で、焼成は不良、胎土は砂粒を多く含む。甌K10は「く」の字に外反する口縁部を有し、体部中央には把手を持つ。器面はハケメによる調整である。底の形状は中央にやや大きめの孔を穿ち、その外周に孔を2列配する多孔の甌である。

この土坑から出土した須恵器、韓式系土器は一括性が高い遺物である。時期は須恵器から見てI型式1段階の範疇で捉えて大過ない一群といえる。

296-00 (第31・35~39図、図版19・78~80A参照)

K18V Sに位置する。平面は不定形で、規模は長径5.6m以上、短径3m以上で未調査区へと続く。断面は緩やかな傾斜を示し、深さは0.44mである。埋土は1層が7.5R6/1赤灰礫混シルト、2層が7.5R4/1暗赤灰礫混シルト、3層が10R6/1赤灰礫混シルトである。土坑内からは須恵器、韓式系土器が廃棄された状態で多量に検出された。検出した土器はそのほとんどが破片であり、更に円筒埴輪片や粘土と見られる塊も検出した。

出土した遺物の総破片数は1658点で、うち須恵器は1089点で蓋、杯身、高杯、把手付碗、甕、器台、鉢の7器種がある。韓式系土器は甕、平底鉢、鉢、甌の4器種がある。

蓋K11は丸い天井部を持ち、刺突文と波状文が施文されている。杯身K14は口縁部が内傾し端部は丸い。受部はやや下がり気味で体部の器壁は厚い。あるいは高杯の可能性もある。高杯は有蓋のK12や無蓋のK13・K15・K16・K20・K26がある。有蓋高杯K12は口縁部が内傾し、受部は水平に長く延びる。一見して特異な土器で体部は黒光りし、器面は丁寧なナデによって調整されている。焼成は硬質で、断面の色調はセピア色をしている。形態からみた場合、半島色の強い影響を受けた土器と思われる。列島における類例としては古寺墳墓群6号土墳墓の遺物があげられる。無蓋高杯は脚部の形状に差異があり裾部に凸帯を持つK15、2段の凸帯を持つK20、孔を穿つK19がある。K26は大型の無蓋高杯が器台と見られる。把手付碗は直線的に立ち上がるK17、やや内湾ぎみに立ち上がるK18がある。何れも体部下半は静止ヘラケズリで調整している。前者はシャープな土器である。波状文は2点とも太い施文である。甕は大型、中型、小型とあり、口縁端部は例外なく断面三角形の凸帯がつくが、先端部は丸く仕上げたものと面取りしたものがある。体部は破片で見ると細い平行タタキによって調整され、内面は丁寧にスリケシている。大型の甕K24は無施文であるが、中型の甕K21のようになかには波状文が施文されたものもある。小型の甕K25は器壁も薄くシャープな土器である。器台K29は径の大きな脚部に三角形のスカシを穿ち、太い5条の波状文を施文している。スカシについては現存しているのは1段だけである。平底鉢は2点出土し、K36・K38は同一個体とみられる。鉢は大型と小型の2形態がある。何れもが口径にたいして器高が低い。大型の鉢K31はやや焼成が軟質に近く、体部には指頭痕跡が残る。これに対して小型の鉢は精練された土器で胎土は緻密で焼成も硬質である。K34は体部は丁寧な回転ナデによって調整されており、高杯K12と同様、特異な感がある。色調はやや灰色である。

韓式系土器の甕K33・K35・K37は口縁部のみの出土であるが、K40・K41の例から見